八雲村の遺跡

八雲村埋蔵文化財分布調査報告

1978

島根県八東郡八雲村教育委員会

巻　頭　言

1.　八雲村は古代出雲文化発祥の地と伝えられています。出雲国一の宮と称される熊野大社があり、その元宮跡と伝える天狗山（熊成峯）に源を発する意宇川沿いの平和郷「八雲」は遠く神話と伝説にゆかりの地に恵まれ、今も古代文化の香が漂っています。

　ここ八雲の人々は、伝えられる郷土の歴史と伝承に大きな誇をもち、先人の遺した数々の文化財に深い関心と愛情をよせています。そして村内にのこされた文化財の保護施策を求める声は最近特に高まってきました。

1.　こうした声にこたえるため八雲村教育委員会は、文化財保護審議会の答申に基いて、文化財の村指定を目標に、村内にある文化財の悉皆調査を、年次計画に基づき委託事業として実施することを計画いたしました。現在までの計画は

(1)　遺跡分布調査（昭和52、53年度）

(2)　動植物分布調査（昭和53、54年度）

(3)　古文書、無形文化財調査（昭和54、55年度）

となっていますが、今後、更に広範囲の悉皆調査を実施し、重要なものは八雲村指定の文化財として保護活用をはかりたいと考えています。

1.　八雲村遺跡分布調査は、島根大学名誉教授山本清先生（調査団長）をはじめ、東森市良先生（横田高校）、池田満雄先生（松江農林高校）、勝部昭先生（県教委文化課）、前島己基先生（県教委文化課）、石倉諒一先生（八雲村文化財保護協会）、平林彰裕氏等、斯道の専門家に調査委託して実施いたしました。この報告書は文化財悉皆調査計画の先駆として取組んだ「八雲村遺跡分布調査」の実施調査結果をまとめたものでありますが、本報告書を通じ、埋蔵文化財特に八雲村内の遺跡保護への理解と関心が高まれば幸と存じます。

1.　この報告書を刊行するにあたり、用務ご多繁のところ調査にあたっていただいた山本清先生をはじめ遺跡調査団の諸先生、考古学専攻の大学生諸氏、報告書編集の労を一手に引受けられた東森市良先生、更にこの調査にご協力いただいた八雲村文化財保護協会（会長、石倉千代司）熊野大社文化財保存会（会長、安達吉市）の方々をはじめ村内関係各位に衷心より深くお礼を申し上げます。

昭和54年２月15日

八雲村教育委員会

教育長　金　乗　達　郎

例　　言

1. 本調査報告は昭和52年度八雲村埋蔵文化財分布調査による結果の報告書である。
2. 本調査は昭和52年度に計画され報告書の発行を含めて50万円の費用が支出された。
3. 本調査団の構成は次の通りである。

　山本　清（団長）、石倉諒一、池田満雄、東森市良、前島己基、平林彰裕
　三宅博士、松浦啓一、井上寛光、堀井伸二、片岡詩子

なお、地元の石倉敬真、石倉常男氏には案内その他いろいろと御協力いただいた。

4. 本書は遺跡地図、遺跡地名表、遺跡の概況、主要遺跡の解説から成っている。
5. 遺跡の分布図は柳浦啓一、片岡詩子が作製し村の1万分の1図を使用した。
6. 本書の遺跡の概況は柳浦啓一、井上寛光、片岡詩子、東森市良が分担執筆し、東森がこれを統一した。
7. 本書の主要遺跡は東森が検討し、小野忠熙、西尾克己、故近藤　正、平林彰裕、勝部昭氏に依頼執筆いただいた。
8. 本書の編集は東森が行ない、図面の作製には山本　清、前島己基、蓮岡法暲、柳浦啓一、井上寛光、片岡詩子があたり、製図はすべて三宅博士の手になる。
9. 調査の期間が短かった上、遺跡の現状が変っていたものも多く不備な調査となっが今後の機会を待って完全なものにしたいと考えている。
10. 今回の調査は全く八雲村独自のものであり、類例は他にみられず、専門職員は設置されていないものの、このような調査が行なわれた意義は極めて大きいと考える。

　なお本調査によって作成された図面、遺跡カードはすべて村に所属している。

1979年2月

八雲村埋蔵文化財調査団

目　　次

巻　頭　言 …… 1
例　　言 …… 4
調査に至る経緯 …… 5
調査の経過 …… 6
遺跡地名表 …… 7
遺跡の概要 …… 13
1. 八雲西百塚古墳群 …… 13
2. 大円寺遺跡 …… 13
3. 大円寺上古墳群 …… 13
4. 大谷古墳群 …… 13
5. 神納遺跡 …… 14
6. 神納横穴 …… 14
7. 神納古墳群 …… 14
8. 岩海古墳群 …… 15
9. 青木横穴群 …… 15
10. 古城遺跡 …… 15
11. 穴田遺跡 …… 16
12. 土井古墳群 …… 16
13. 増福寺裏山古墳群 …… 16
14. 増福寺古墳群 …… 17
15. 四歩市古墳群 …… 17
16. 四歩市横穴群 …… 17
17. 高丸古墳群 …… 18
18. 高丸横穴群 …… 18
19. 池ノ尻古墳 …… 19
20. 中山古墳群 …… 20
21. 谷ノ奥古墳群 …… 20
22. 安田古墳群 …… 20
23. 安田横穴群 …… 21
24. 外輪谷横穴群 …… 21
25. 禅定寺横穴群 …… 21
26. 折原横穴 …… 21
27. 折原下堤遺跡 …… 22
28. 大日堂横穴 …… 22
29. 岩坂神社横穴 …… 22
30. 雲場古墳 …… 23
31. 岩屋口横穴群 …… 23
32. 細田横穴 …… 23
33. 高野横穴 …… 24
34. 恩部遺跡 …… 24
35. 田寄横穴群 …… 24
36. 小島古墳群 …… 25
37. 宮内横穴 …… 25
38. そ の 他 …… 25
主要遺跡
1. 空山遺跡 …… 26
2. 勝負谷1号墳 …… 27
3. 松廻古墳群 …… 31
4. 原ノ前横穴 …… 39
5. 雨乞山古墳 …… 41
6. 伝熊野出土銅鐸 …… 42
結　　語 …… 44

図　版　目　次

図１　神納遺跡出土土器
図２　古城遺跡出土土器
図３　古城遺跡出土土器
図４　穴田遺跡出土土器
図５　池ノ尻古墳出土土器
図６　折原横穴出土勾玉
図７　折原下堤遺跡出土土器
図８　大日堂横穴出土土器
図９　岩坂神社横穴出土土器
図10　岩屋口横穴出土土器
図11　恩部遺跡出土土器
図12　恩部遺跡出土土器
図13　東岩坂出土石斧
図14　空山遺跡採集の石器
図15　勝負谷１号墳の立地
図16　勝負谷１号墳遺構配置図
図17　勝負谷１号墳第１主体実測図
図18　勝負谷１号墳出土遺物実測図
図19　松廻２号墳墓坑実測図
図20　松廻１号横穴実測図
図21　松廻４号横穴実測図
図22　松廻１号横穴出土大刀
図23　松廻横穴群出土土器
図24　松廻横穴群出土土器
図25　松廻横穴群出土土器
図26　松廻横穴群出土土器
図27　松廻横穴群出土鉄器
図28　原ノ前横穴実測図
図29　原ノ前横穴出土土器
図30　雨乞山古墳石室実測図
図31　伝熊野出土銅鐸実測図
附図１～４　八雲村の横穴略測図
附図５　松廻横穴群出土土器（八雲公民館蔵）

調　査　に　至　る　経　緯

私が八雲村の古墳の調査を手がけたのは、昭和23年のことであった。それは県下一円の分布調査の一環として主に雨乞山古墳の墳丘と石室の実測を行うこととなったが、それからすでに30数年が経過している。ご承知の通り近年とみに開発の波が各地におし寄せており、埋蔵文化財の破壊の頻度もきわめて高くなっている。このような折に埋蔵文化財を破壊から守り、よりよく保存伝承すべく今回八雲村当局においてその悉皆調査が計画されたことはよろこびにたえない。

元来八雲村においては文化財担当者であった安達　進、石倉諒一両氏による独自の分布調査があり、昭和47年には東森市良君も加わってその結果が集成されている。これは村内の主だった遺跡を当時の知りうるかぎりの範囲で記録にとどめたものであった。ところがその後の宅地造成、道路新設、農地改良などにともなって検出される遺跡も少くなく、昭昭48年には勝負谷一号墳が、そして51年には原ノ前横穴が調査の対象として発掘消滅した。これ等はいずれも従来の分布調査では確認されていなかったものである。もっとも分布調査にも限度があり、すべてを明らかにしつくすことは大きな困難をともなうものであるが、少しでも多くの古墳や遺跡を確認しておいて、それを破壊から守るにしくはない。

私が今回の計画に賛意を表し調査の依頼をうけた折にその責任を負うことを引き受けたのもそのような点に意義を見出したからに他ならない。たとえ小なりといえども遺跡であるからにはその価値は大なるものと変りはなく我々の祖先が残した歴史の遺産である。それを少しでも多く後世に残し伝えるのがこの分布調査の最大の意義であると考える。そして地元の方々の関心がこの調査によって一層高まるよう期待するものである。

なお特にこの際にふれておきたいことは、すでに島根県において埋蔵文化財の分布調査が数次にわたって行なわれているが、このように村単位で計画された例を寡聞にして聞いていない。そこに村当局の熱意をみることが出来るし、そのような風土だからこそ遺跡も生き続けるのだということを確信するものである。

調査にあたっては一応団を編成したが、実際歩いて実査すると昭和47年当時と比べてかなり変貌したものもあり、中には荒地と化して遺跡の範囲を再確認することのむずかしいものもあった。従ってこのような分布調査は一回済ませればそれで良いというものではなく一度基礎になるものを作った上で年次毎に再確認していく作業もまた必要であることを改めて痛感した次第である。

この分布調査が将来の一層の文化財保護と研究に役立つようねがっている。

山　本　　清

調　査　の　経　過

八雲村文化財審議委員会は、昭和52年1月13日の八雲村文化財保護についての答申で文化財の保護施策の推進をあげ、文化財の指定による保護の上で第一に各種文化財の悉皆調査を行うことの必要を指摘した。この答申にもとづいて八雲村教育委員会は文化財の年次的悉皆調査を実施することとし、その第一年度として埋蔵文化財の調査を昭和52年度20万円をかけて行うこととなった。実施に当って八雲村教育委員会は調査を山本　清島根大学名誉教授を団長とする八雲村埋蔵文化財調査団に依嘱した。調査団の構成メンバーは、山本　清（団長）、石倉諒一、池田満雄、東森市良、前島己基、平林彰裕、三宅博士、柳浦俊一、井上寛光、堀井伸二、片岡詩子であり、八雲村教育長以下委員会の方々にはその都度立会いをお願いした。

御承知の如く八雲村は文化財に対する関心が深く昭和47年には東森市良、安達進が加わって石倉諒一氏の指導のもとに一応の分布調査を終えていた。これは東森が概報の形で教育委員会に報告し、「八雲村遺跡分布調査記録」としてまとめられている。

今回の分布調査はそれをもとにして、該当遺跡の現状、未確認遺跡の発見を主体とした。したがって、前回までの調査記録がもととなっている。しかしながら前回確認出来なかった横穴などで今回の調査で明らかとなったものもある。それに加えて百塚古墳群のうち八雲村分については八雲西百塚古墳群として加えることにした。これは今後の課題の一つであるが、なお精査すれば数が増えることは明らかである。調査に当ったものとしては誠に残念であるが、東出雲町との境界分については十分明らかにし得ていない。今後の精査を期待する次第である。

調査は8月を中心として行なった。以下その概略を記すと、8月16日石倉、東森、前島、井上、堀井、柳浦で日吉、雨乞山周辺を調査した。8月17日には、石倉、東森、前島、井上、堀井、柳浦で土井古墳群、増福寺古墳群、増福寺裏山古墳群、四歩市横穴群、禅定寺古墳群、中山古墳群、池の尻古墳、山崎土器散布地を調査した。8月21日には、石倉、東森、池田、堀井、井上、柳浦、片岡で、細田横穴、安田横穴、同古墳外輪谷横穴群、谷の奥古墳群、岩屋口横穴、折原下堤遺跡を調査した。8月22日には石倉、東森、柳浦、堀井、井上、片岡、平林で掛合散布地、高野横穴、松廻古墳群、同横穴群、松廻遺跡を調査した。以上の他に同日恩部散布地及び記載はしていないが熊野大社裏山の古墳又は古墓群の調査は、小島古墳群の調査も行っている。また、大日堂横穴、岩坂神社横穴については実踏はしなかったものの平林調査員から聞き書きを行った。さらに田寄横穴群、折原横穴群についてもこの日に調査を行った。このように限られた日数の中での分布調査ではあったが主要遺跡についてはほゞ完全にこれをカバー出来たものと考える。なおこの際は樹木の繁茂する中での調査であった為墳形その他において十分調査したとは云いがたい点のあることも附言しておきたい。

遺　跡　地　名　表

No.	種別	名称	所在地	現状	概要	出土品	備考
1	横穴	和田平横穴群1号	日吉　字和田平	尾根直下			埋没
2		2号		〃			〃
3		3号		〃			〃
4	古墳	八雲西百塚山古墳群　1号	日吉	尾根上	円墳　径5m 高1m		
5		2号		〃	〃　径6.2m 高0.5m		
6		3号		〃	〃　径3.5m 高0.5m		
7		4号		〃	〃　径4m 高0.5m		
8		5号		〃	〃　径10m 高2m		
9		6号		〃	中世墳墓？径3m 高0.3m		
10		7号		〃	円墳　径5m 高0.5m		
11		8号		〃	〃　径3m 高0.5m		
12		9号		〃	〃　径7m 高0.5m		
13		10号		〃	〃　径7m 高0.5m		
14		11号		尾根をはずれる	〃　径8.5m 高0.5m		
15		12号		尾根斜面	〃　径1m 高0.5m		
16		13号		〃	〃　径6m 高1m		
17		14号		〃	〃　径5m 高0.5m		
18		15号		〃	〃　径5.5m 高0.5m		
19		16号		〃	〃　径5m 高0.5m		
20		17号		〃	〃　径10m 高2m		
21		18号		尾根上	〃　径5m 高0.5m		
22		19号		〃	〃　径9m 高2m		
23		20号		〃	〃　径11m 高2.5m		
24		21号		〃	方墳　1辺11.3m 高4m		盗掘抗あり
25		22号		尾根の南側	円墳　径7m 高1.5m		
26		23号		〃	〃　径6.3m 高1m		
27		24号		尾根斜面	〃　径3m 高0.5m		
28		25号		〃	〃　径5m 高0.5m		
29		26号		〃	〃　径8m 高1m		
30		27号		〃	〃　径6.5m 高1.5m		
31		28号		〃	〃　径4.3m 高1m		
32		29号		〃	〃　径6.5m 高2m		

No.	種別	名称	所在地	現状	概要	出土品	備考
33	古墳	八雲西百塚山古墳群 30号	日吉	尾根斜面	円墳 径7.5m 高1m		
34		31号		〃	〃 径6.5m 高1.5m		
35		32号		〃	〃 径5.5m 高0.5m		
36		33号		〃	〃 径7m 高1m		
37		34号		〃	〃 径8m 高0.5m		
38		35号		〃	〃 径4m 高0.5m		
39		36号		〃	〃 径12m 高3m		
40		37号		〃	〃 径5.5m 高1m		
41		38号		〃	〃 径8.7m 高3m		
42		39号		〃	〃 径6.5m 高0.5m		
43		40号		尾根下	〃 径5m 高0.5m		
44		41号		〃	〃 径12m 高2.5m		
45		42号		〃	方墳 1辺11.5m 高3m		
46		43号		〃	円墳 径8m 高1.5m		
47		44号		〃	〃 径5m 高0.5m		
48		45号		〃	〃 径5m 高1.5m		
49		46号		〃	〃 径5m 高0.8m		
50		47号		〃	方墳？ 1辺15m 高4m		
51	古墳	大円寺上古墳群 1号	日吉	丘陵中腹の平坦面	円墳 径9.3m 高1.5m		
52		2号		〃	〃 径8m 高0.5m		
53	住居址散布地	大円寺遺跡	日吉大円寺	奥の谷	崖断面に住居址（古墳時代）	土師器	
54	古墳	大谷古墳	日吉字大谷	尾根上	円墳 径8.5m 高1m	小持壷	横穴式石室埋没
55	散布地	御崎谷散布地	日吉字御崎谷	谷		須恵器、土師器	
56	古墳	岩坂御陵参考地	日吉字神納	丘陵先端	円墳？ 径16.2m 高1.8m		
57	横穴	神納横穴	日吉字神納	丘陵中腹	天井を家形に加工		
58	古墳	神納古墳群 1号	日吉字神納	丘陵上	円墳 径8.2m 高1.4m		
59		2号		〃	〃 径8.7m 高1m		
60		3号		〃	箱式石棺	須恵器（蓋、坏）	旧県史4
61		4号		〃	円墳？ 径7m 高0.5m		
62		5号		〃	方墳 1辺12m 高1.5m		
63	散布地	神納散布地	日吉字神納	丘麓		土師器、須恵器	
64	古墳	岩海古墳群 1号	日吉字岩海	山頂	方墳 1辺9m 高2m	須恵器	
65		2号		〃	円墳 径7m 高1m		
66	古墳	勝負谷古墳群2号	日吉字勝負谷	丘陵上	方墳 1辺11m 高1m		

No.	種別	名称	所在地	現状	概要	出土品	備考
67	古墳	勝負谷古墳群3号	日吉字勝負谷	丘陵上	円墳 径9m 高1.7m		
68		4号		〃	〃 径6.5m 高1m		
69	横穴	青木横穴群 1号	西岩坂字椎ノ木谷	丘陵中腹			
70	散布地	古城遺跡	西岩坂 元田 古城	低丘陵上		須恵器、土師器	
71	散布地	穴田遺跡		谷の奥		埴輪、円筒、土師器	
72	横穴	原の前横穴	東岩坂 川向 原の前	丘陵中腹		須恵器	調査後消滅
73	古墳	雨乞山古墳	東岩坂 雨乞山	山麓	墳形不明		石棺式石室開口
74	古墳	土井古墳群 1号	東岩坂 川向 郷ノ上	丘陵先端	方墳 1辺9m 高1.6m		
75		2号		〃	〃 1辺8m 高1.5m		
76		3号		丘陵上	古墳？6.5m×8.5m		
77		4号		〃	方墳 辺8×7m 高0.8m		
78		5号		〃	〃 1辺9m 高0.5m		
79		6号		〃	〃 1辺9.5m 高0.5m		
80		7号		〃	〃 1辺8.1m 高0.5m		
81		8号		〃	〃 1辺9m 高0.5m		
82		9号		〃	円墳 径11m 高3m		
83		10号		〃	〃 径10.5m 高1.5m		
84		11号		〃	〃 径10.5m 高1m		
85		12号		〃	〃 径10m 高1m		
86	古墳	増福裏山古墳群 1号	東岩坂 川向	〃	円墳 径9m 高0.5m		
87		2号		〃	〃 径9m 高2m		
88		3号		〃	〃 径11.5m 高2.3m		
89		4号		〃	〃 径10m 高2m		
90		5号		〃	〃 径10.5m 高1.5m		
91		6号		〃	〃 径10.5m 高1.7m		
92		7号		〃	〃 径10m 高1.5m		
93		8号		〃	〃 径9m 高1m		
94	古墳	増福寺古墳群1号		〃	円墳 径8.2m 高0.8m		
95		2号		〃	〃 径10.5m 高1.2m		
96		3号		〃	〃 径12.5m 高1m		
97		4号		〃	〃 径10m 高1m		
98		5号		〃	〃 径12m 高1.5m		
99		6号		〃	〃 径9m 高1m		
100		7号		〃	〃 径7.5m 高0.5m		

No.	種別	名称	住在地	現状	概要	出土器	備考
101	古墳	増福寺古墳群8号	東岩坂　川向	丘陵上	円墳　径8m 高1.5m		
102		9号		〃	〃　径8m 高1.5m		
103		10号		〃	〃　径7.5m 高0.5m		
104		11号		〃	〃　径8.5m 高1.5m		
105		12号		〃	〃　径8m 高1m		
106		13号		〃	〃　径8.5m 高1.5m		
107		14号		〃	〃　径12m 高1.5m		
108		15号		〃	〃　径7.5m 高0.5m		
109		16号		〃	〃　径10.5m 高2m		
110		17号		〃	〃　径8m 高0.8m		
111		18号		〃	〃　径8.5m 高1.5m		
112	横穴	四歩市横穴群1号	東岩坂　市場　四歩市	丘陵中腹	丸天井		
113		2号		〃	〃		
114		3号		〃	〃		
115		4号		〃	〃　？		
116		5号		〃			
117		6号		〃			
118		7号		〃			
119		8号		〃	丸天井		
120		9号		〃			
121		10号		〃	丸天井		
122		11号		〃			
123		12号		〃			
124		13号		〃	丸天井		
125		14号		〃	〃		
126		15号		〃	平入家形		
127		16号		〃			
128		17号		〃			
129		18号		〃			
130		19号		〃			
131		20号		〃			
132		21号		〃			
133		22号		〃			
134		23号		〃			

No.	種別	名称	所在地	現状	概要	出土品	備考
135	横穴	四歩市横穴群24号	東岩坂 市場 四歩市	丘陵中腹			
136	古墳	四歩市古墳群1号	東岩坂 市場 四歩市	丘陵尾根上	方墳 1辺9m 高1m		
137		2号		〃	円墳？ 径7.5m 高0.8m		
138		3号		〃	円墳 径6.5m 高0.5m		
139		4号		〃	〃 径6.5m 高1m		
140		5号		〃	〃 径7m 高0.5m		
141		6号		〃	〃 径6m 高0.5m		
142	横穴	高丸横穴群 1号	東岩坂 市場 四歩市		横穴 平入家形		
143		2号			〃 丸天井		
144		3号			〃 〃		
145		4号			〃 〃		
146	古墳	高丸古墳群 1号	東岩坂 市場 四歩市		円墳 径10.5m 高1.5m		
147		2号			〃 径15m 高1.5m		
149	古墳	池の尻古墳	東岩坂 前田	水田中	石室露出 2.5m	刀、須恵器	
150	散布地	山崎遺跡	東岩坂 山崎	水田中		須恵器	
151	古墳	中山古墳群 1号	東岩坂 中山	丘陵先端	円墳 径6.5m 高0.7m		
152		2号		丘陵上	〃 径14m 高2m		
153	古墳	谷の奥古墳群1号	東岩坂 谷の奥	丘陵先端	円墳 径5.5m 高0.5m		
154		2号		〃	〃 径5.5m 高0.5m		
155		3号		〃	方墳 1辺9.5m 高2m		
156	横穴	安田横穴群 1号	東岩坂 安田	低丘陵尾根近く	丸天井		
157		2号		〃			
158	古墳	安田古墳群 1号	東岩坂 安田	尾根上	円墳 径4m 高0.5m		
159		2号		〃	〃 径6m 高0.4m		
160	横穴	外輪谷横穴	東岩坂 安田 外輪谷	丘陵中腹		刀	その他は不明
161	横穴	禅定寺横穴群1号	西岩坂 大日 禅定寺	谷の奥、尾根近く			
162		2号		〃	丸天井		
163		3号		〃			
164		4号		〃	丸天井		
165		5号		〃			
166		6号		〃			
167	古墳	禅定寺古墳群1号	西岩坂 大日 禅定寺	尾根上	円墳 径6m 高0.7m		
168		2号		〃	〃 径6m 高1m		
169		3号		〃	〃 径7m 高0.5m		

No.	種別	名称	所在地	現状	概要	出土品	備考
170	古墳	禅定寺古墳群4号	西岩坂 大日 禅定寺	尾根上	円墳 径7.5m 高1m		
171		5号		〃	〃 径11m 高2m		
172		6号		〃	〃 径11m 高0.5m		
173		7号		〃	〃 径8.5m 高0.7m		
174		8号		〃	〃 径15m 高1.5m		
175		9号		〃	〃 径8.5m 高1.6m		
176	横穴	折原横穴群 1号	西岩坂 大日 折原入口	丘陵中腹			
177		2号		〃			
178		3号		〃			
179	散布地	折原下堤遺跡	西岩坂 大日 折原	池の堤		土師器、須恵器	
180	横穴	大日堂横穴	西岩坂 大日	尾根伝いの東斜面		須恵器	
181	横穴	岩坂神社横穴	西岩坂 大日	〃		須恵器	
182	横穴	岩屋口横穴群1号	西岩坂 岩屋口	丘陵麓		須恵器	他は埋没
183	古墳	雲場古墳	熊野 大石	丘陵上			
184	散布地	掛合散布地	熊野 大石 掛合	低丘陵上		須恵器	
185	横穴	細田横穴	東岩坂 細田	丘陵中腹	平入家形		
186	横穴	高野横穴	熊野 大石 高野	丘陵中腹		須恵器	旧県史、八束郡誌
187	横穴	松迫横穴群 1号	熊野 大石 松迫	丘陵麓		須恵器	昭和42年調査 消滅
188		2号		〃		須恵器	消滅
189		3号		〃	丸天井	須恵器	
190	古墳	松迫古墳群 1号	熊野 大石 松迫	丘陵尾根上	円墳？ 径11m 高0.5m		
191		2号		〃	円墳 径9m 高0.5m		
192		3号		〃	〃 径12m 高1m		
193		4号		〃	〃 径6m 高1m		
194	土壙	松迫遺跡	熊野 大石 松迫	丘陵上	土壙状の落ち込み	須恵器	
195	散布地	恩部遺跡	熊野 恩部	低丘陵上		須恵器、土師器 黒曜石、チップ	
196	横穴	田寄横穴群 1号	熊野 稲葉 田寄	丘陵麓			
197		2号		〃			
198	古墳	小島古墳群 1号	熊野 宮内 小島	丘陵尾根上	円墳 径10m 高1.5m		
199		2号		〃	〃 径11.5m 高1.5m		
200	横穴	宮内横穴	熊野 宮内	丘陵中腹			
201	包含層	空山遺跡	熊野 空山	丘陵上		旧石器？	昭和46年調査
202	古墳	土井古墳群13号	東岩坂 川向 郷ノ上	丘陵端	方墳 辺8.5m 高1.5m	土師器、縄文式土器、石斧	昭和53年調査

遺　跡　の　概　要

1.　八雲西百塚古墳群

松江市と八雲村の境となる西百塚山丘陵上に立地する古墳群である。円墳44基、方墳3基からなる八雲村最大規模の古墳群で、近藤正氏による松江側の調査分を加えるとゆうに百基をこえる。さらに未確認の東出雲分を加えるとこの丘陵上の古墳群は山陰でも最大級のものの一つになるであろう。西の松江市との境界線から1、2～46、47号とする。円墳は径3～12メートル、高さ0.3～3メートルの規模をもち、中でも径5～7メートル、高0.5～1.5メートルのものが多い。円墳のうちやや大きいものは36号墳（径12メートル、高さ3メートル）38号墳（径8.7メートル、高さ3メートル）である。方墳はこの古墳群中では大きいものばかりで21号墳（1辺11.3メートル、高さ4メートル）、42号墳（1辺11.5メートル、高さ3メートル）、47号墳（1辺15メートル、高さ4メートル）であるが、47号墳は円墳の可能性もある。また6号墳（径3メートル、高さ0.3メートル）は中世墳墓の可能性もある。

この地域は、わずかな平坦地があれば必ずといってよいほど古墳が存在し、その密集度には驚かされる。また方墳に比べ円墳が圧倒的に多うことも注目される。

2.　大円寺遺跡

西百塚山丘陵によってできた浅い谷の奥に立地する遺跡である。標高20メートル、眼前には平垣地が広がり西面している。現在は荒地となっているが、以前茶畑にするために整地したところ、崖面に住居址の断面が現れ土師器が採集された。周囲の遺跡としては、背後の丘陵上に立地する八雲西百塚山古墳群、同丘陵中腹の平坦面に立地する大円寺上古墳群がある。

3.　大円寺上古墳群

西百塚山丘陵中腹の平坦面に構築された二基からなる古墳群である。標高30メートル、浅い谷の奥に位置する。1号墳は径9.3メートル、高さ1.5メートル、2号墳は径8メートル、高さ0.5メートルの規模をもち、共に円墳である。2号墳には盗掘杭が穿たれている。同丘陵尾根上、及び尾根近くには多数の古墳が存在し、八雲西百塚山古墳群を構成しているが、この古墳とは立地が異なり両者が離れていること等から、両者は別群だと思われる。この古墳群が大円寺遺跡のほぼ直上に位置していることから同遺跡との関係が注目される。

4.　大谷古墳群

雨乞山から北西に派出する丘陵の尾根筋に立地する。標高70メートルのかなり険しい丘陵で、見はらしがよく、日吉地区が一望できる所に位置している。古墳は傾斜面につくられ、径8.5メートル、高さ1メートルの規模をもつ円墳である。内部構造は横穴式石室で開口しているが、土砂の混入が著しく詳細は不明である。昭和44年の分希調査で子持壷の小

壷が採集されている。昭和47年の分布調査では、この丘陵上でもう1基の円墳が確認されているが、今回の調査では雑木繁茂のため確認できなかった。また確認した古墳も前回調査の時に比べ、かなり崩壊しており石室石材がわずかに露出していたためにからくも確認できた程である。

この古墳が標高70メートルの高所にあって、眺望がよく、石室構造であり小持壷を出土していることなどから被葬者の性格が注目される。

5. 神納遺跡

本遺跡は、神納横穴、同古墳群の位置する丘陵の南側斜面の台地状の所にあり、現在畑地となっている。以前、土地所有者が耕作中に古式土師器を採集しており、今回の分布調査で、土師器高坏の坏部二片、須恵器の蓋坏、甕の胴部片を採集した。これらの土器は現地表面下1メートルの黒色土層から出土している。

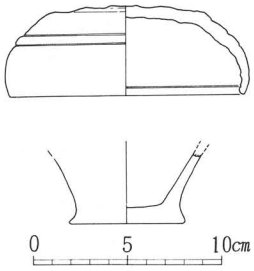


図1　神納遺跡出土土器

これらのことから考えてみるに、本遺跡は住居址の可能性があり、神納横穴、同古墳群を営んだ集団の生活の場所だと思われる。

6. 神納横穴

陵墓参考地のある丘陵に存在し、石倉吉郎宅裏の中腹斜面に一穴、南方に開口している。当地方では「ドワ」と呼ばれる岩に掘られたこの横穴は、整正家形に属するものと考えられ、壁と天井を区別するが如き界線状の溝をめぐらしており、入口から奥壁に向っても同様な溝が天井中央に走っている。規模は奥行2.1メートル、巾1.77メートル、入口巾0.9メートル、羨道の長さ1.2メートル、高さは中央で0.95メートル、壁高は0.35～0.4メートルである。この横穴には「昔穴」の伝えがあり、古くからここが知られていたことがわかる。上方屋根上の神納古墳群との関係、また、この横穴が八雲村入口に位置していることが注目される。

7. 神納古墳群

岩坂御陵参考地と神納横穴と同丘陵の尾根上に位置し、現在樹木が茂っていて、判別しにくいが、数基を数える。参考地に近い方から1号墳と名付ける。1号墳は径8.2メートル、高さ1.4メートルの円墳である。2号墳は径8.7メートル、高さ1メートルの円墳であるが、西側裾部は樹木の為不明確である。3号墳は墳丘の痕跡は認められないが、凝灰岩の箱式石棺と思われる石材が遺存し、その一部は埋没している。以前、蓋坏とみられる須恵器が発見されており、この蓋を見てみると、天井部には削りがあり、体部には二本の沈線が入っており、内側は二段の口唇になっている。第三期になるであろう。また、この石棺のことは古くから知られ、「旧島根県史第四巻」に記載されている。昭和47年の分

布調査によると、当時現存した石材は切石四枚、その他で、巾50～40センチ、長さ30～40センチ、厚さ20～30センチあり、埋没した石よりすると、主軸をほぼ東西方向にとり、長さ約２メートル、巾約80センチの規模であったとされる。また明治40年の発掘の時、朱の入った壷が出土したと伝えられている。そしてこの古墳群より出土した須恵器片は甕が多く、その他３～４個の蓋材、埴輪と思われる凸帯を有するものもある。４号墳は径７メートル、高さ0.5メートルの円墳かと思われるが不明である。５号墳は辺12メートル、高さ1.5メートルの方墳で、盛掘杭らしき痕跡がある。また岩坂御陵参考地を含む神納地区の古墳群は１グループであり、その生活址が神納遺跡と思われるし、南方の山に囲まれた水田、また日吉から松江の方に広がる水田一帯が彼らの生産場所であったように思われる。

8. 岩海古墳群

意宇川を東に臨む、やや高い尾根先端に立地する古墳群である。尾根の先端から１号墳２号墳とし、１号墳は方墳、２号墳は円墳である。１号墳は１辺９メートル、高さ２メートル、２号墳は径７メートル、高さ１メートルの規模をもつ。いずれも10メートルにも満たない小規模墳ではあるが、標高が50メートルでかなり険しく日吉地区を一望できる尾根上に立地することは注目される。

１号墳の南西墳裾部からは、かなり大きな須恵器片が２片採集された。これらは大甕又は横瓶かと思われるが破片のため定かではない。表面は格子目風叩き目文が施され、内面は同心円状の叩き目文が残る。大型製品にごく普通に見られるものである。破片が２片のためこれによって年代を決定することはできない。

9. 青木横穴群

椎木谷の入口に立地する横穴群で、開口するのは１穴のみである。標高50メートルの丘陵中腹に構築され、西面している。唯一つ開口している１穴は、平面が円形をしており、丸天井である。界線も刻線もなく、天井と壁との区別はない。出土遺物もなく時期の決定はできない。以前はこれ以外にも開口したというが確認できない。

１０. 古城遺跡

古城遺跡は、意宇川から約250メートル西方の低丘陵上に位置し、正面には雨乞山を望む。この地域は茶畑で、面積26.8メートル×33.0メートルの中にⅢ期及びⅣ期かと思われる須恵器片の散布が見られ、特に西側山裾に多く採集できる。竹籔を切り開いた際にできたと思われる西側崖面の土層は約1.2メートルあり、その内２層目の褐色土層90センチ中、地表から60センチのところで土師器の低脚坏がでている。この土器の色調は明褐色で、胎土はわずかに砂が混ざっているが、焼成は良好である。脚　は8.4センチで、坏部は欠損のため明らかでない。整形にはなでが見られる。ま

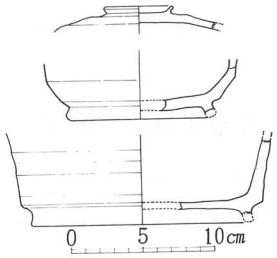


図２　古城遺跡出土土器

た、この他に崖面付近では、甑の把手、糸切りのある須恵片、坏の立ち上がり部分などが今回の調査で採集された。なお、以前には高台付埦も出土している。

11. 穴田遺跡

川向春日線の道路の右手に通称穴田池があり、その池の奥の堤の水面ぎりぎりの部分の粘土質層に土器を包含する層がある。現在、樹木が成っており、範囲を確認することはできない。以前、円筒埴輪、土師器片が上方の丘陵斜面や堤防から発見されたが、埴輪片は、現在所在不明、土師器片は八雲村公民館に保管されている。そのうちの一片を見てみると、底部片で、推定底径5センチで、高さ、口径は不明である。ロクロで形成し、後、内側が仕上げナデを施している。石英等のガラス質の鉱物が含まれ、胎土はあまりよくはないが、焼成は良好で、何かにより外部が赤褐色に変色している。これは高坏と思われるものである。またこの散布地の性格として、もし土器等が、本当にここにあったものとすれば、古墳の破壊流出、須恵古窯址、住居址、その他の条件のうち、住居址の可能性が強いように思われる。また、立地としては、川向の水田一帯をおさえるべく最高の場所と思われ、後述の雨乞山古墳、周辺の古墳は、この散布地と関係があるように思われる。

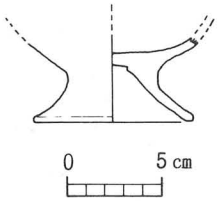


図3　古城遺跡出土土器

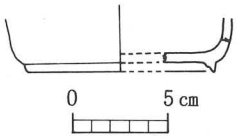


図4　穴田遺跡出土土器

12. 土井古墳群

西岩坂、東岩坂低地の東部の標高50メートル以下のなだらかな独立丘陵に立地する古墳群である。方墳7基、円墳4基、墳形不明1基から構成され丘陵北端から1、2～11、12号とする。これらは比較的わずかな面積にまとまりを見せる。全て辺、径が8.1～11メートル、高さ1.5～3メートルの規模で、最大のもので径11メートル、高さ3メートル（9号墳、円墳）である。墳形不明のものは3号墳で、6.5×8.5メートル、高さ0.5メートルの範囲をもつが、これが古墳であるかどうかは検討の余地がある。方墳で最大規模をもつ1号墳は北部と東部が破壊されている。9号墳は円墳中最大のもので、他の古墳とは違い一目で古墳とわかる程明確な墳丘をもつ。またこの9号墳は11号、12号墳と同様、尾根筋からわずかにはずれている。このことは、それ以外の古墳が尾根筋に沿ってほぼ一直線上に並んでいることを考えればやや特異である。この古墳群は以前から知られており、かつてこの地から土器が検出された。

13. 増福寺裏山古墳群

土井古墳群と同じ丘陵に立地する古墳群である。土井古墳群のやや南西、増福寺の裏に位置し、円墳8基から構成されまとまりを見せる。土井古墳群に近い方から1、2～7、8号とする。規模は径9メートル～11.5メートル、高さ0.5～2.3メートルあり、最大のも

のは径11.5メートル、高さ2.3メートルを測る（3号）。4号墳は径10メートル、高さ2メートルの規模をもっが半壊している。

14. 増福寺古墳群

土井古墳群、増福寺裏山古墳群の立地する丘陵の南に位置する。この古墳群は同丘陵の最高所に増福寺をとりまくように位置している。北（増福寺に近い所）から1、2～17、18号墳とする。全て円墳で、径7.5メートル～12メートル、高さ0.5～1.5メートルの規模をもち、最大のもので径12メートル、高さ1.5メートル（5号墳）である。1号墳は北西部、18号墳は北部が大きく掘りとられており共に残存は半分である。この2基は版築によって盛土された痕跡が明瞭に残っており、他も同様であろう。この丘陵上に存在する土井古墳群12基、増福寺裏山古墳群8基、増福寺古墳群18基を総計すると38基にものぼり、八雲村内では八雲西百塚山古墳群に次ぐほどの大規模な古墳群であり、県内でもこれほどに集中している例は珍しい。比較的狭い地に集中しているので一つの古墳群のように思われるが、各古墳群ごとにある程度の間隔をもっているのでやはり区別すべきであろう。

土井古墳群では方墳が多くの割合を占めるのに対し、増福寺裏山、増福寺古墳群では全て円墳となっているのは興味深い。

15. 四歩市古墳群

四歩一横穴群の上の尾根上に構築されており、6基確認出来る。この古墳群は円墳が主である。1～3号墳は、東方に、4～6号墳は西方に構築され、二分されている。

1号墳は、辺9メートル、高さ1メートルの方墳である。2号墳は、径7.5メートル、高さ0.8メートルの円墳と考えられる。3号墳は、径6.5メートル、高さ0.5メートルの円墳である。4号墳は、径6.5メートル、高さ1メートルの円墳である。5号墳は、径7メートル高さ0.5メートルの円墳である。6号墳は、径6メートル、高さ0.5メートルの円墳である。

以上の他に群細は明らかではなかった。この古墳群は、安田に伸びる水田地帯の入口にあり、当地域を支配し、生活の場としていた集団が被葬されていると思われる。

16. 四歩市横穴群

これは、四歩一古墳群と密接な関係があると考えられる。

増福寺古墳群と隣合う、現在東出雲町に通じる道路一大東、東出雲線一に面した丘陵の北斜面とその裏側に群集する横穴群である。マサ土の地山に掘り込んでいる。この横穴群の中で現在確認出来るものは2穴が北斜面に22穴が南斜面にあり、南斜面は、三段に構築され、上段が3号から7号、15号から17号まで、中段が8号、9号、18号から24号まで、下段が10号から14号までであるが、上、中段は東西に二分されているのが、興味をひく。

このうち、1号穴は北側に開口し玄室は平面方形で、周囲に溝をめぐらし、壁との区別をつけている。天井は典型的な丸天井であり、羨門部には閉塞の為と思われる段があり、前庭部は羨道部より若干低くなっている。2号穴も北側に開口し、玄室は平面方形である

が、1号穴とは異なり、周囲には溝をつけず、また玄門部にも段をつけていない。天井は1号穴と同様、丸天井である。羨門部で閉塞用の段をつけ、前庭部を設けている。

3号穴は、南方に開口し、天井は丸天井であるが、その他は、土砂の流入により、不明である。

4号穴は、3号穴の隣りにあり、開口しておらず、詳細は不明である。

8号穴は、中段の西側に構築され、天井は丸天井であり、壁との界線が明瞭な軒の線により、区別されている。

10号、13号、14号穴は、丸天井であり、それ以外不明である。

15号穴は、東側上段の中央に構築され、天井は平入家形であり、南側に屍床を設けている。この横穴群唯一の家形天井を持っている。

その他の9号、11号、12号、16号～24号穴は、埋没等の度により、詳細不明である。

この横穴群は、丸天井が主流を占める。

17. 高丸古墳群

高丸横穴群を構成する丘陵に立地する2基からなる古墳群である。1号墳は丘陵中腹のやや平垣になっている所に築かれ、径10.5メートル、高さ1.5メートルの円墳である。2号墳は丘陵の尾根のややはずれた所に築かれ、径15メートル、高さ1.5メートルの規模をもつ円墳である。

この2基の古墳は便宜上群としたが、両者には若干の相違が見られる。即ち、1号墳は中腹の平坦地（標高50メートル）に構築されているが、2号墳は丘陵を登りきった標高70メートルの所に築かれていること、1号墳では東岩坂川を臨むが、2号墳では東岩坂川よりむしろ反対則の川原川を臨み得ること、1号墳では高丸横穴群と隣接しているが、2号墳では近辺には横穴が確認されなかったこと、などである。

18. 高丸横穴群

西に東岩坂川を臨む標高120メートル程の丘から派出する丘陵斜面に構築された横穴群である。麓の方から1、2、3、4号穴とする。1～3号穴は標高40メートル程の比較的低い位置に構築され、いづれも西面している。1号のやや右上方に2号が、2号のさらに右上方に3号が位置する。4号はこれら3穴のはるか上方、標高80メートルの、尾根に近い所に構築され北面している。

1号穴は全長2.1メートル、玄室奥行1.3メートル、玄室幅2.2メートル、羨道幅0.8メートル、高さ0.8メートル、床面正方形の家形平入である。天井と四壁の境には界線がめぐり両者を区別している。しかし、屋根形の線が明確でなくわずかに痕跡を遺す程度である。奥壁はやや傾斜しており、高さが羨門と玄室最高所とほぼ同じであることからもかなり退化した家形平入であろう。羨門は閉塞用板石をはめる、くり込みをもつ。

2号穴は全長1.8メートル、玄室奥行1.1メートル、玄室最大幅1.1メートル、羨道幅0.7メ

ートル、高さ0.9メートルの床面円形の丸天井の横穴である。奥壁に沿って6センチの溝状の掘り込みがめぐり、羨道天井部の最奥には幅10センチ、深さ3センチ程のくり込みが見られる。この横穴にも羨門に閉塞用板石をはめるためのくり込みがある。

3号穴は、全長2.05メートル、玄室奥行1.4メートル、玄室幅1.2メートル、羨道部幅0.8メートル、高さ0.7メートルの丸天井の横穴である。床面は2号同様円形であるが、やや方形が遺っているようにもみうけられる。閉塞石はめ込み用のくり込みがあるのは1、2号穴と同様である。奥壁には後世掘り込まれたと思われる穴が穿たれている。

4号穴は、2、3号穴と同様、床面円形、丸天井であるが、羨門にはくり込みはない。羨門部に木が生えているので内に入りにくく、規模等は不明である。

19. 池ノ尻古墳

中山丘陵北側の低地（現在水田）の中にあり、水田造成に際し、土砂を取り去ったもので、現在は、凝灰岩の石材が露出した状態である。なお、石室は半壊している。石原文雄宅に出土遺物が保管されており、遺物は刀（消失）、須恵器の蓋坏（蓋1、身1）、提瓶2、瓮1が残っている。この古墳は、八束郡誌に記載されているものである。

遺物をみてみると、蓋坏の蓋は、口径13.2センチ、高さ3.7センチで、成形は右回りのロ

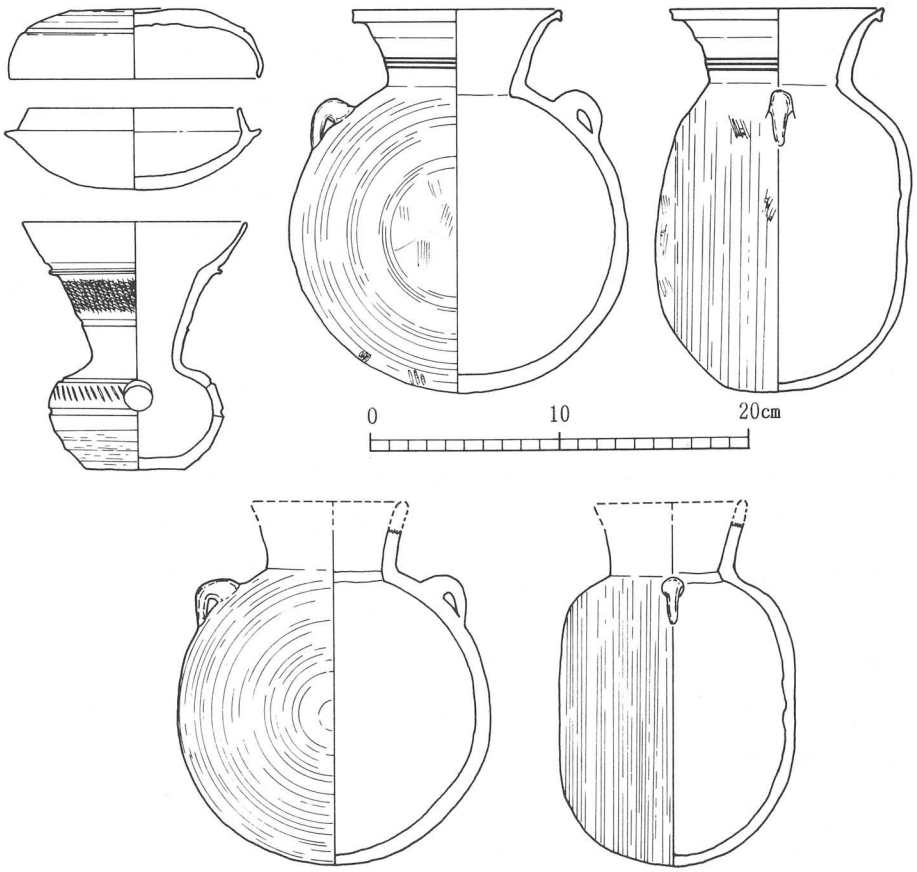


図5　池ノ尻古墳出土土器

クロを使用し天井部にケズリが見える。焼成は良好で、色調は青灰色である。口縁部の内側がかえっているし、口縁から2.4センチのところに巾0.3センチの沈線が一周している。身の方は、口径が11.2センチ、厚さ0.3センチ、高さ4.4センチで、成形はロクロを使用し体部に仕上げナデが施されている。胎土は、ガラス質の鉱物が混り、不良である。焼成は良好で、色調は、灰色だが、低部外側に自然釉がかかっている。高ち上りの長さが1.2センチ程ある。提瓶は、頚部径6.8センチ、最大径16.8センチ、残部高20センチである。肩部に自然釉が流れている。カキ目をナデで消したり、タタいてカキ目を消したりしている所が胴部にある。胎土は堅致で焼成は良好、色調は暗青灰色で、低部に3.3×4.4センチの土器片が付着し、また、口縁部が欠損している。肩部に2つつまみがついている。もう一つのは、口径11.4センチ、高さ20.5センチ、頚部径7.6センチ、最大径13.2センチであって、成形はロクロを使用している。胎土は鉱物等が混っている。焼成は良好、色調は暗青灰色である。これも同様に肩部に2つのつまみがついている。甕は、高さ13.3センチ、口径12センチ、成形は左回りのロクロを使用し、胎土は小砂が混っている。焼成は良好で、色調は晴青灰色である。体部の下方はヘラ削りがある。内側口縁に自然釉がかかっている。頚部の沈線は端が一致せず、胴部の下方の沈線は一周していない。

20. 中山古墳群

二基が確認されたが、この二基の古墳群は、丘陵の先端近くに位置している。南西の丘陵には、禅定寺古墳群、同横穴群、折原下堤遺物散布地があり、これらとの関係の有無や、このように二基離れて存在することで注目される。

そのうち1号墳は、径6.5メートル、高さ0.7メートルの小円墳である。

2号墳は、径14メートル、高さ2メートルの円墳で、墳頂と思われる所には、荒神が祭られており、古くからここが信仰の対象の場となっていたことをうかがわせる。遺物については明らかではない。

21. 谷ノ奥古墳群

三基確認されるが、これも、中山古墳群と同様のあり方をしており、散在的である。位置としては、中山古墳群の南東の所にあり、禅定寺古墳群のちょうど、東方にあたる。また、この古墳群の東方は、東岩坂川が作る低地帯があり、対峙した丘陵には、高丸横穴群が位置している。そして、250メートル南々東には、安田横穴群、同古墳群が位置している。

そのうち1号墳は、径5.5メートル、高さ0.5メートルの円墳で、北側が半壊している。

2号墳は、径5.5メートル、高さ0.5メートルの円墳である。

3号墳は、丘陵突端に位置し、一辺9.5メートル、高さ2メートルの方墳で、北側の一部が壊れている。

22. 安田古墳群

二基確認される。

まず1号墳は、径4メートル、高さ0.5メートルの円墳である。

2号墳は、径6メートル、高さ0.4メートルの円墳である。

この古墳群は、裏の谷斜面に位置する外輪谷横穴群＝一穴しか確認されなかったが、地元の人によると数基あるということである＝と同じグループとして考えねばならないだろう。

2 3. 安田横穴群

二穴確認される。低丘陵の尾根に近い所に位置している。現在、土砂の流入、剥落の為、原形を知るのは困難である。この横穴群は、風化した花崗岩に掘り込んで作っている。

まず1号穴は、玄室が、平面方形で、天井は、平型である。壁には天井と区別するが如く、界線が若干残っている。規模は、奥行2.2メートル、巾2.3メートル、入口巾0.75メートルで、現在面から天井までは60センチ内外である。神納横穴、四歩市2号横穴と比べると、若干玄室巾が広いように思われる。

2号穴は、1号の右隣りにあるが、多量の土砂流入の為、詳細は不明である。二穴とも南東に開口している。

2 4. 外輪谷横穴群

外輪谷横穴群1号は、安田古墳群西方の山林に囲まれた丘陵の中腹に位置している。この横穴は、南斜面の軟質の岩山に掘り込んであるが、全体的に粗造である。壁はほぼ垂直で、軒先を約5センチ程突出させて天井と壁の区別を明確に示していることから整正家形だと思われるが、天井部はアーチ形に掘ってある。玄室の床面はほぼ正方形で、幅1.95メートル、奥行1.8メートル、最大高1.16メートルである。羨門付近は、10年前に開口した際コンクリートで固めたため、その形態は定かでないが、閉塞には河原石を作った模様である。羨道は長さ約30センチで極めて短いものである。また、地元の伝えによると、開口した当時、長さ約30センチ、幅約2センチの刀剣が出土したようだが、すでに紛失してしまい今はないとのことである。なお、この丘陵の上方には、まだ古墳がいくつかあるようであるが、今回の調査では確認することができなかった。

2 5. 禅定寺横穴群

西岩坂、東岩坂の低地の東南に位置する丘陵の北側の、浅い谷となっている所の奥に構築された8穴からなる横穴群である。ほぼ尾根の直下、標高60メートル程の所に2段に築かれており、尾根に近い上段3穴を東から1、2、3号とし、下段の3穴を4、5、6号とする。1～3号が4～6号の上段に位置することから、これらは若干の時期的な差が考えられる。内部は、2号が丸天井、4号が丸天井、平面方形の構造をしているが他は埋没しており不明である。出土遺物はないが、この丘陵中腹で内外面に叩き目文のある須恵器片を表採しており、この横穴群のものと考えられる。

横穴群は北西に開口しており、西岩坂、東岩坂の低地がよく眺望できる。この丘陵斜面がかなり急であるにもかかわらずこの横穴群が構築されたことは注目される。また、この丘陵の尾根上にもやはり古墳群が存在する。

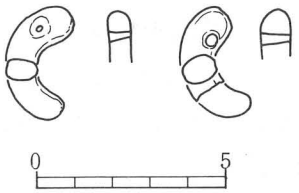


図6　折原横穴出土勾玉

2 6. 折原横穴

八雲村役場の裏に当る大日にあり、かって遺物が出土していて、そのうち二個の勾玉が現在同地の米田敏郎宅に所蔵されている。勾玉はめのう製でそのうちの一つは、こはく色を呈しよく磨研されていて、長さ2.9センチ、幅0.9センチ、厚さ0.5センチあり頭部の穴は片側からあけている。その二は一と同様であるが、下半部を欠失しておりやゝ大型の品である。

27. 折原下堤遺跡

禅定寺横穴群、同古墳群の南方、300メートル内外の所に二ケ所に土器片の包含層が存在している。ちょうど、丘陵が二分した谷であり、そこに三つの池があって、包含層の一つは、一番下の池の南壁にあり、そこから須恵器片や土師器片を出土する。もう一ケ所は、一番上の池の北壁のところに梨畑があるが、その梨畑がそれであり、須恵器片や土師器片を出土する。

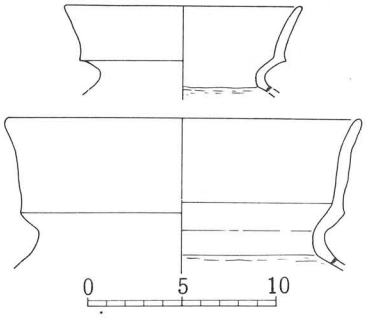


図7　折原下堤遺跡出土土器

この遺跡の北方には禅定寺横穴群、同古墳群があるが、これらの古墳群の被葬者達が、ここを、生活の場としたものと推測される。

28. 大日堂横穴

村道役場秋吉線と県道大東東出雲線とにはさまれた丘陵の北先端の尾根づたい東斜面に構築された横穴である。詳細は不明であるが、北方は西岩坂、東岩坂地区の低地を臨み、さらに雨乞山をも眺望できる地形に立地する。近くには磐坂神社横穴、岩屋口横穴があるが、散在しており群として見ることはできない。

この大日堂横穴から須恵器高杯が採集されている。この須恵器は、暗青灰色の低脚系高杯で口縁部が欠けており、現存最大高9センチ、脚最大径9.2センチを測る。全体に凹凸が激しく、調整はかなり粗くて、粗雑な感じがするものである。脚部には縦方向の線状の切り込みが二方に入れられ透孔を模している。透孔が形骸化していることや全体の調整の粗雑化などからこの須恵器は、山陰地方須恵器を四期に分けた場合のⅣ期に当たると思われる。

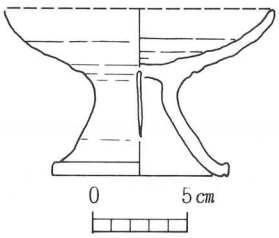


図8　大日堂横穴出土土器

若干の違いはあるが同様の高杯が近くの岩坂神社横穴から出土しているのが注目される。

29. 岩坂神社横穴

岩坂神社参道の下の東斜面に一穴開口している。この横穴は、平面方形で、天井は丸天井であり、花崗岩質岩に掘り込んでいる。規模は、玄室奥行2メートル、玄室巾2メートル、高さ96センチ、羨道の長さ40センチ、

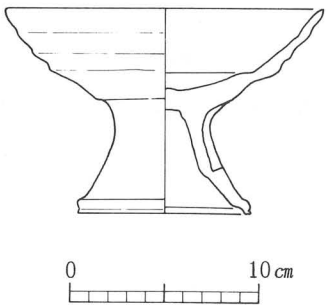


図9　岩坂神社横穴出土土器

幅75センチである。

また遺物についてみると、須恵器の高杯で口径10.8センチ、高さ11センチ、厚さ0.3センチで、成形はロクロを使用し、その後、内測は仕上げナデが施されている。胎土は小砂を含んであまり良くない。焼成は良好で、色調は灰色であり、高台部に、二ケの透しの退化したもの＝ヘラによる沈線＝が残されている。

30. 雲場古墳

雲場古墳は、意宇川中流の右岸にある小高い丘陵上に位置し、その東側には県道が走っている。この古墳の墳形は、円墳かと思われるが定かでなく、墳丘のある付近には、小規模な長方形状に石で囲ってある祠跡がある。出土遺物はない。

31. 岩屋口横穴群

西岩坂の桑並川にそった低地が北東にひろがる曲り角に位置している。昭和39年4月道路拡幅に際して、ブルトーザーによって低地に東面する二穴が破壊され、現在崖面に痕跡をとどめている。水田面からの比高は約5メートルあり、更に上部には別の落ち込んだ個所もあるのでいま少し多くの横穴の存在が考えられる。穴は花崗岩の風化したマサ土に掘り込まれている。現在公民館に昭和39年4月17日付で保管されている遺物は、いずれも須恵器で甕2、横瓶1、蓋茶碗形杯2、小形蓋杯の実2がある。いずれも須恵器のⅣ期のらしい時期にあたる。発見の際には人骨の完全なものが4～5体あったというが再埋葬されていて詳細は不明である。

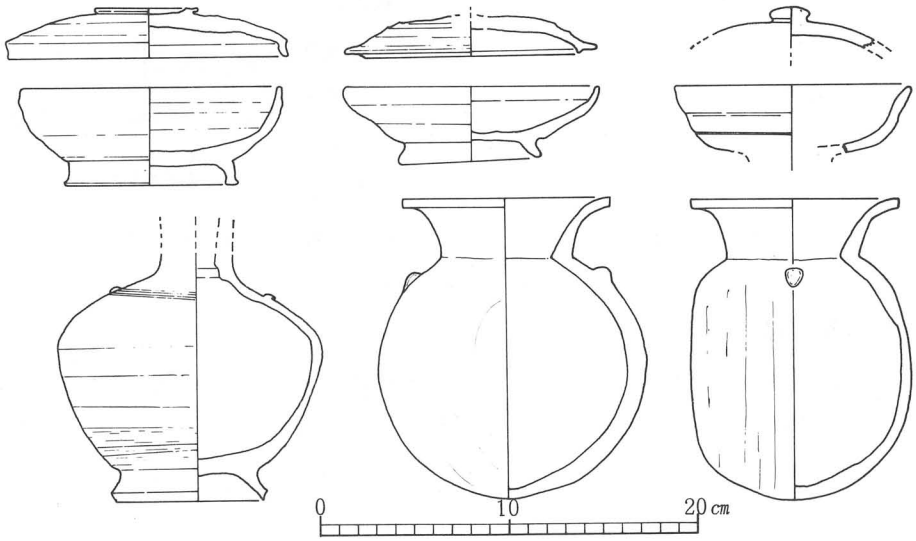


図10　岩屋口横穴群出土土器

32. 細田横穴

東岩坂農道沿いから東側の丘陵の中腹に位置し、南向き斜面に穿たれている。この横穴は四柱式平入りではあるが、全体的に粗造である。玄室の床面は、横長の長方形で、幅約2.2メートル、奥行約2.0メートル、高さ約1.18メートルで、奥部にむかってわずかに狭

くなっていく。奥壁、側壁とも天井部との区別をつける明確な界線はない。羨道は約1.2メートルで比較的長いが、羨門の形態は明らかでない。

3 3. 高野横穴

県道沿い東側にある宅地裏の崖面に穿たれている。地表から約80センチの所にあるが、ほとんど破損しているため詳細は明らかではなく、入口の幅は約1.05メートルあり、奥壁の一部が残存している。今回の調査で、崖面付近では須恵片、谷の奥の路上では須恵器及び土師器片を表面採集した。また、以前には、刀剣類もここから出土している。

3 4. 恩部遺跡

恩部遺跡は、意宇川流域の左岸の低い丘陵上に位置している。この付近は、土器及び黒曜石の散布地であり、今回の分布調査でも、須恵片、土師片、そして黒曜石のチップの表面採集ができたことから、旧石器時代から古墳時代の遺跡と思われる。

以前、この近辺から出土した遺物は、蓋杯の蓋が3個ある。蓋杯は、暗灰色を呈し、胎土は粗いが、焼成は良好である。器高は4.8センチ、口径13.4センチである。成形はロクロ整形で、天井部には、ヘラ削りも見られ、さらに仕上げのための横ナデが見られる。また、蓋は、焼成中に生じたと思われるゆがみが多少はあるが、全体的に丸味を帯びていて、やや中央寄りに付けられている沈線による突帯によって、天井部と口縁部の区別がなされている。口縁部は単純化しているが、第Ⅲ期の型式を踏んでいると思われる。いま一つの蓋は、青灰色を呈し、焼成は良好である。器高は5.0センチ、口径13.8センチである。成形はロクロ整形で、天井部はヘラ削りが明瞭である。また、前者と同様、全体的に丸味を帯びて、口縁部と天井部は、沈線による突帯によって区別が成されているが、口唇部には、わずかに二段式かと思われる沈線が残っていることから、Ⅲ期にかかると思われる要素を含んでいる。

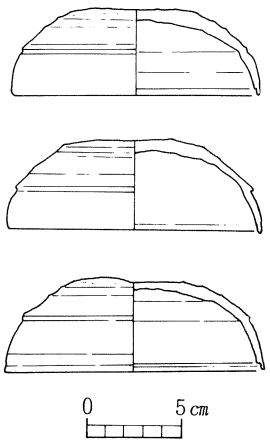


図11　恩部遺跡出土土器

3 5. 田寄横穴群

稲葉の字田寄の家の奥にある。熊野大社裏山の尾根続きで意宇川の低地に面する。この丘陵の北側の小谷をさかのぼると八壁から空山に通ずる。

横穴は二穴開口しており、他にも一ケ所落ち込みのあるところからするとなお数穴の存在が考えられる。開口したもののうち一穴は平面円形、丸天井形で床部との接点はかまぼこ状にやゝふくれている。規模は奥行き1.6メートル、幅2.5メートル、高さ80～90センチで入口は約1メートルある。花崗岩に掘り込んでいるが、剥落によってかなり

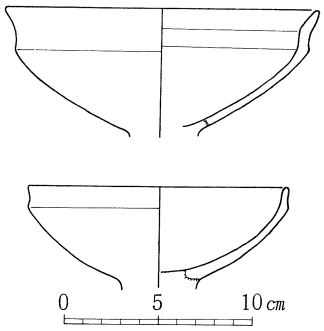


図12　恩部遺跡出土土器

原形をそこねている。

3 6. 小島古墳群

二基確認出来る。

まず1号墳は、径10メートル、高さ1.5メートルの円墳である。

2号墳は、径11.5メートル、高さ1.5メートルの円墳である。

この古墳群は、田寄横穴群と同一グループと思われ、意宇川が作った狭い低地帯を、生活基盤としたものであると思われる。

3 7. 宮内横穴

熊野大社の裏にあたる丘腹に一穴開口している。平面方形、丸天井型であるが、平面のプランは三味線の胴に似てふくらみを持つ。壁面と天井を区別する意識がわずかに働いている。奥行き1.6メートル、幅2.3メートル、高さ1メートルをはかる。入口の部分はくずれており、床面にも入口で30センチ近くの土砂が混入している。

3 8. その他

単独出土の遺物では、石斧の出土地が勝負谷、鈩谷などにあるが、そのうちの一つ東岩坂の石倉文雄宅出土例をみると、庭に池を掘った際に地表下60センチぐらいのところから出土している。石斧は全面磨製で上部を欠失しているが、現存長10.5センチ、幅4.5センチをはかり、弥生時代に通有の蛤刃石斧の形態をとっている。当村内からは現在のところ、弥生式土器は神納遺跡の平底土器片を除いてはっきりとしたものはみられないが、弥生時代人の生活が営まれたことを推測させるものがある。

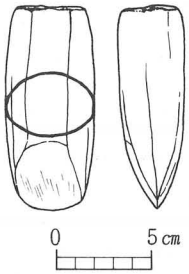


図13　東岩坂出土石斧

主　要　遺　跡

1.　空山遺跡

標高411メートルの空山山頂附近一帯は縄文時代の遺物がかなり広範にわたって分布しており、土器のはっきりしたものはつかめていないが、これまでに図示した石匙や石鏃など十数点が採集されている。このうち石匙は横形につまみのつくサヌカイト製、石鏃は三角形の黒曜石製である。石鏃はこの他にもあるがいずれも黒曜石製であることに変りはない。

ところで昭和46年に恩田　清氏によってこの山腹に玉髄やめのうを原材料とする旧石器の存在が指適され、昭和46年7月末の約一週間その一かくについて当時山口大学教授であった小野忠熙氏を中心として発掘調査が行われた。空山の遺跡附近の地形と地質は、基盤岩が中新世の安山岩質 Lava あるいは同質 Tuff breccia でその侵食面であると推定され、吉備高原面に対比される可能性がある。発掘地はこの侵食面を刻下する岩壁斜面の上部に位置している。発掘地の地質はこの基盤の上に山頂部から供給された陶汰不良の数メートルの礫層が堆積し、更にその上に大山、三瓶山の火山灰が覆っている。部分的に火山灰を切る小ガリが形成され、その小ガリの中により新らしい角礫層が堆積していることもある。火山灰下の礫層は下部の腐食の著しく進んだ巨礫層と上部の小円礫を含む粘土層とに二分される。遺物色含層は後者とその上層である。この二層の年代は確定出来ないが、乃木段丘の礫（乃木礫層）と同年代か、それより古いと思われる。発掘地区における地層はⅠ～Ⅴの五層に分けられ、そのうち第Ⅳ層は安山岩の巨礫や岩塊を含む黒褐色土層で、この層の上部に遺物色含層が集中的にみられるが下部にクサリ礫や珪化木が安山岩塊とともにシルトに含まれた土塊流があり、少量の玉髄の破片や加工痕のある石片が含まれている。このうち確かな石器と調整された石材の原石塊や剥片は安山岩の円礫と一緒に流されて同時に堆積したことを示しているが、転流による磨滅痕がみられないことから推して、これらの起源地点はその後の侵食をうけて削り去られた山上の縁辺部付近であったと推定される。

出土した石器とされるものは握斧、握槌、削器、盤状石器があり、調査においては削器と盤状石器の二点が出土した。小野忠熙氏は空山出土の遺物が旧石器であるという証拠として、（1）自然の営力ではできない角度からの加撃によって剥離されていること。（2）

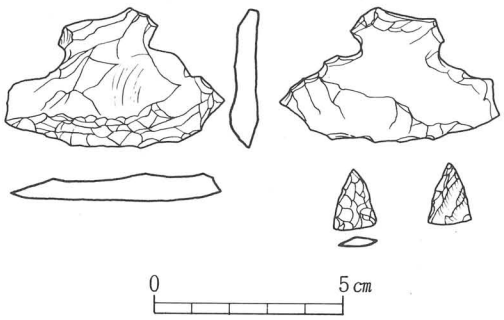


図14　空山遺跡採集の石器

石器の組成が敲打、打割、剥離の機能をもつ四種類からなっている。（3）ローム層から多量にまとまって出土した原石塊は石器として加工するのに都合のよい程度に加工、集積されている。（4）石質には黄色や赤色の玉髄とめのうがあるが近辺から産出しないのでこれはヒトによって何処からかもたらされたものと考えられる。（5）吉備高原面に相当する地形面に存在し地層の上から明らかに洪積世の第三間氷期かそれ以前にまで遡り、日本での広義の前期旧石器の所産であるとして良いという点をあげている。

2. 勝負谷1号墳

位　置

本古墳群の位置は八束郡八雲村大字日吉354番地の山林で、意宇川の西岸にあたり、八雲村の中心部をなす低地の西側を流れる意宇川が大きく東に屈折する部分にあたっている。かつてこの附近から石器が出土したと伝えられており昭和47年5月の分布調査の際にかなり精査したが土器片その他を谷及びその前面の水田から検出し得なかった。のちに丘陵上の樹木が伐採されて本古墳群が確認されたわけで、今回調査を行った1号墳（方墳）と2～4号墳（円墳）が東にのびる尾根の支脈上に分布している。伝承によると1号墳の南部にはかなりの広さの平担部があるが、これはかつて宅地となっていたもののようである。2号墳以下の円墳はこの平担面より上部にあって次第に階段状をなして尾根の高所にいたっている。なお1号墳は尾根の先端部が突出して幅広くなって北面する部分に位置しており、水田面との比高は約20メートルばかりである。

この古墳群の附近にはかなりの古墳群や横穴が存在し、八雲村の入口には小円墳によって構成される神納古墳群や中裏手山横穴があり小谷をはさんで方墳二基から成る古墳群があって意宇川西岸の尾根上にはいたるところといって良い程に古墳群が存在している。

また東岸には標高156メートルの雨乞山があるがその北側の標高150メートル附近に横穴式石室を内部主体とする二基の円墳から成る大谷古墳群があり、更に小低地をこえて西百塚古墳群がある。またこの山の南麓にあたってかつての交通路の要地には八雲村最大の雨乞山古墳があり石棺式石室を持つ古墳として注目される。これらの古墳群や古墳は雨乞山古墳を除いていずれも10メートル程度高さ1.5～2メートルの規模の小古墳であるが、古墳時代中期以降の村落古墳のあり方を知る上で貴重な資料となるものといえる。方墳の数は極めて少いが、これらの古墳に混じっている方墳の年代を知る上でも本古墳の調査は一つの意義を有するものであった。

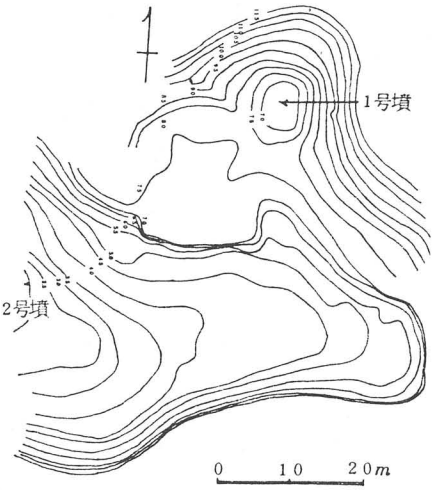


図15　勝負谷1号墳の立地

墳　丘

墳丘は平面ではやゝ隅丸の方形をなす10×11メートルの長方形で上部に3.5×5メートルの平担面があり、南北が長くなっている。これが地形の制約によるものであることは、全体的に地形が北方に突出した部分にあたることからも明らかである。墳丘の築成の状況は地山を整地したのち土を盛っており、トレンチの所見によると北及び東に地山が傾斜している。それは南北トレンチにおいて北で2.2メートルぐらいの盛土が南では70センチ程度となっており、東西トレンチにおいては西で60センチの盛土が東では70～80センチと下っていることによって示されている。

盛土は石やブロックを多く含み、中央部では20センチの表土の下に帯状のバンドを含みつつ60センチにわたって築みあげられた粘土質の土があって、その下に厚さ10～15センチの黒色土がみられ、その下は褐色土で40センチ程度軟質の粘土層があって、礫を含む赤褐色粘土層に移行する。この褐色土層以下がかつての地山であり、黒色土層は古墳築造前の旧表土にあたる腐色土層である。

なお、地山の傾斜とあわせて東西の場合さほど地山層の上下はみられなかったが、南北では中心点より南に5メートルばかりのところから溝を掘っており幅4.5メートルあってこれによって南の高い部分との区別をなしている。この溝は明らかに区別のためのものであって自然傾斜を区切っており、墳丘全体にめぐるものではない。

北側の墳丘裾には、中心より北6メートル附近で高さが2.8メートル下がったところに自然石を用いた列石群があってここで自然の傾斜との区別がみられる。また、西側はあまり明瞭ではなかったが東側はやはり必ずしも同一レベルとは云えないものの墳丘裾にあたる部分に点石が認められた。

このように墳丘を画するにあたって南は丘陵を切断して溝を掘り、北は石を並らべて自然傾斜と区別をし、列石はこの北側で大型の石を用いて直線状に並らんでいて注目された。

従って、この古墳の墳丘は地山をある程度ならして旧表土を削ることなく、西及び特に南に溝を掘り、土を盛りあげて南で75センチ、北で約2.5メートルの高さとし長方形の墳

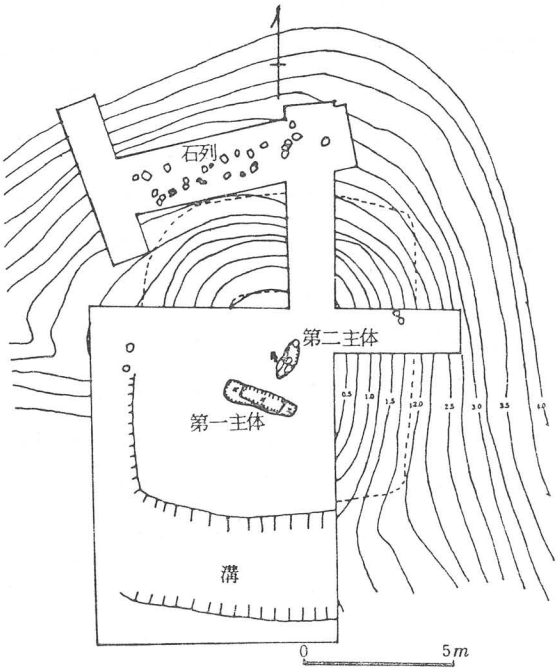


図16　勝負谷1号墳遺構配置図
×印は埴輪円筒

丘をつくりあげたと考えられる。

内部主体

東西トレンチ南壁に幅40センチ、深さ20センチの落ち込みがみられ、これをのちに第2主体と呼ぶこととなった。また、南北トレンチ西壁に埴輪円筒片の密集部分があり、これを拡張したところ三個の埴輪円筒が直線的にほぼ1メートル間隔で並らびその範囲は2.7メートル×60センチの小判形となった。これを掘形に注意しつつ掘り下げたところのちに墳地の上面と判断した部分から円、角礫が群集している状況となりその下に長さ1.5メートル、幅50～60センチ、深さ32センチの墓**坑**が現われた。これを第1主体とした。

第1主体は上述のごとく埴輪円筒を並べた**坑**の中に更に長方形の墓**坑**をうがってあり、内部からは置石の他に埴輪円筒片、土師器高杯の脚部を検出したが副葬品は認められなかった。第1主体の作り方はまず盛土の中に**坑**を掘り木棺を直葬したのち山、川石を積み土を盛りその上にやゝ大き目の**坑**を掘って埴輪円筒三個を立てたもので円筒の上部は表土面に並らんでいたものである。それは三個ともに上部が欠失したり破片となって並んでいることによって明らかである。墳丘裾からも盛土にまじってかなりの埴輪片が出ているがこれと主体部に置かれた埴輪円筒との関係は不明である。

第2主体は第1主体に直交するように掘られており不整小判形で長さ1.5メートル、幅50センチあった。これも第1主体と同じように盛土に墓**坑**を掘り棺を直葬し7個以上の自然石を積んでいる。しかし第1主体のように長方形をなさず、浅い部分にうめられており

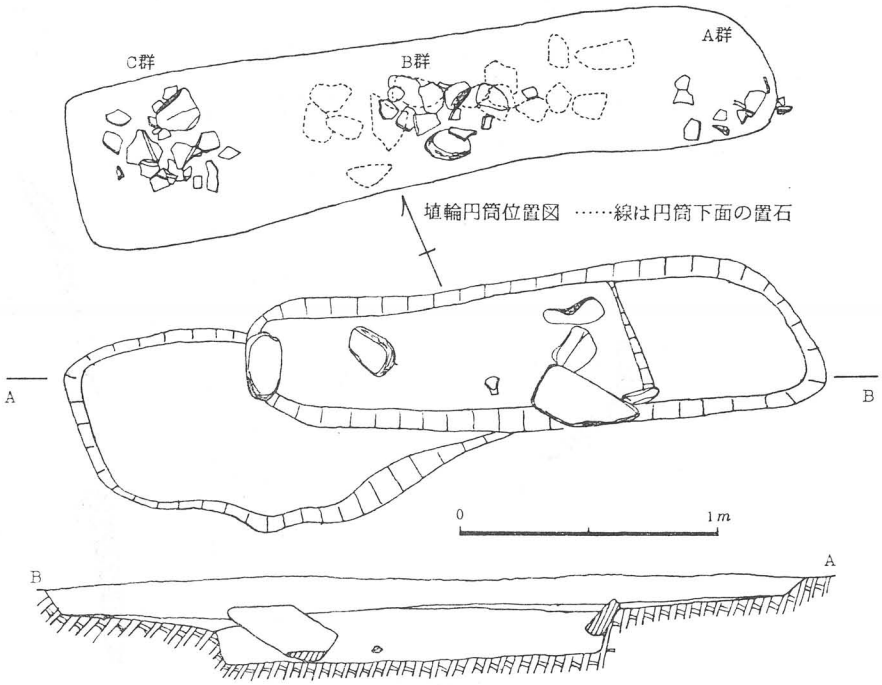


図17　第1主体実測図

埴輪円筒もともなっていない。第1主体との切りあいの関係もみられないが以上の状況からしてまず第1主体が葬られたのちおくれて第2主体が葬られたものと思われる。

以上はいずれも墳丘上部の平担面中央部において検出したものであるが、その他の遺構は他の部分の調査においても認められなかった。

まとめ

本古墳の立地はすでにふれたが、八雲村においては入口の部分にあたっており、尾根上に点在するようにして古墳群が存在するその一つであって、群集墳としての密度は低く殆んどが数基をもって一群を構成している。そして多くが円墳であり時期的にも古墳時代の後期、須恵器第Ⅲ形式以降のものを主とするのに対して、本古墳は方墳であり須恵器をともなっていない点でも注目される。

また、出土遺物は極めて少なく、まとまった土器の供献は認められなかったが、盛土上面及墓地内の埋土にまじって出土した高杯は葬送儀礼との関係を考えしめるものがあり、須恵器出現前後の特徴をそなえていて大東町の大東高校校庭遺跡出土品や松江市の薬師山古墳出土品との関連を考えしめるものがある。

なお、埴輪円筒片がかなり墳丘裾などからも出土しているが、特に注目しておきたいのは、墳丘中央部第1主体上面に埋置された三個の円筒列であって、墓坑を掘り遺骸を埋葬したのち石でそれをおおい土を盛りその上にあたかも墓坑を標示するかの如く並らべられている。これは、墓域を画するという大規模古墳にみられる埴輪円筒の用い方と異なった、小規模古墳における特殊な葬送儀礼のあり方を示しているものといえよう。このような例はいまのところ山陰ではみられず、横穴の入口に1本の埴輪円筒を立てる例がそれに近いとも云えるが、今後本古墳のような類例のふえることをまってあらためて古墳における葬送儀礼を考えてみたい。

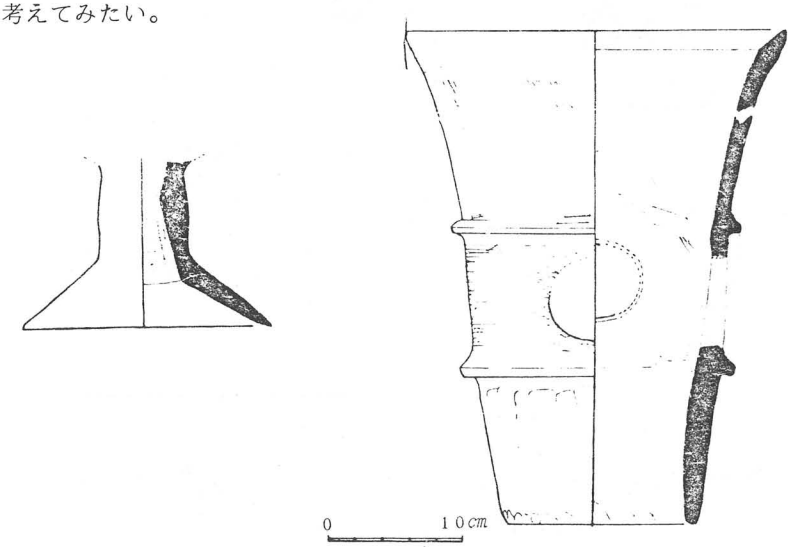


図18　出土遺物実測図

以上のような状況からして本古墳は八雲村ではじめて確認された中期古墳であること、2～4号墳が須恵器をともなう円墳であることの関連性が注目されること、意宇平野の特徴である方墳の伝統が八雲村入口附近にも及んでいることなどから、小規模古墳ではあるがその意義の大きいことを評価しておきたい。

3. 松廻古墳群

1. 所在地　八雲村大字大石字松廻

2. 調査の事情　岩坂のたばこ組合による造成地に含まれたものであり、ブルドーザーによる造成によって横穴が発見され調査が行われることとなった。

3. 調査の期間　昭和42年12月10日から9日間、遺物の整理に約1週間をついやした。

4. 古墳群の位置　県道松江一大東線沿いにあって、意宇川の中流その右岸にあたる。この附近は標高60メートル前後であって、川の流れにそって狭隘な平地が続いている。古墳群はその水田地帯に突出した丘陵尾根の5～6基の古墳とその南側斜面にある横穴7～8穴で構成されている。その標高は古墳で80メートル前後、横穴の場合65メートルぐらいである。

5. 古墳　古墳は細い丘陵の尾根上に点々とあって盛土を施した形跡はきわめて少なく、かろうじて墳丘があると認められる程度のものが四基あり、東から1～4号墳と呼ぶ。そのうち発掘したものは中央の二基のみである。

（第2号墳）墳丘の裾は不明である。しかしその規模は径16～17メートル、高さ3メートルのものとみられる。内部構造は木棺直葬で土坑が認められる。その長さは1.4メートル、幅は東側で60センチ、西側が80センチ、深さ20センチ、坑底から表土上面までは50～70センチあまりあって、そのうち表土の厚さは40センチ前後である。副葬品は認められなかった。

（第3号墳）東西に長い墳丘で、これも墳丘の裾は不明瞭である。東西約28メートル、南北14メートルの長方形状を示し、高さは約2メートルある。中央部に土坑があって主軸は東西を示し、規模は第2号墳と同じ位で、長さ2.6メートル、幅1メートル、深さ20センチで、表土までの高さは約60センチある。副葬品はない。

なお、この第2、第3号墳の東側にある第1号墳は径10メートル、高さ1メートル前後の小規模のものであり、第3号墳の西にある第4号墳は第1号墳と同じ位のものである。さらにその西側には30メートルほどの尾根が平担地となっており、その部分にも埋葬施設の存在が考えられる。

6. 横穴

横穴群はこの尾根の南側斜面にあるもので、尾根の突端からはじまり中ほど近くまで続いている。

横穴は少くとも四段になっていて、最上段は2穴、第三段は3穴、第二段は2穴、第

一段は4～2穴あったと思われる。このうち最下段の1穴はブルドーザーによって破壊された。

（第1号横穴）隅丸の横に長いプランをもち両側に副葬品を置いている。天井は不明であるが、おそらく丸天井に近いものであろう。副葬品は南に土器と工具、北側に土器、武具、前庭部に鋤先が置かれていた。

（第2号横穴）第1号横穴の南東にあるもので羨道と前庭の長く細いものであり、玄室についてはごく一部を発掘したにとどまっている。天井は丸天井であるが、落下して穴が埋まっている。東南隅に提瓶があった。

（第3号横穴）第2段に掘られたもので、これも前庭と羨道、玄室のごく一部しか発掘していない。天井は丸天井で、両脇に土器、羨道と玄室の境に鉄鏃があった。なおこの上部に第三段目の一穴がある。

（第4号横穴）一番東側にあるもので、プランは隅丸梯形を呈し低い丸天井をなす。玄室入口に土器を置いている。この横穴が、全形を最も良く残している。

7. 結果

完全な調査ではないのでまとまった結論は出せないが墳丘と横穴群との関係について考えさせるものがあり、また横穴の出土遺物の中に農具、工具など比較的秀れたものを

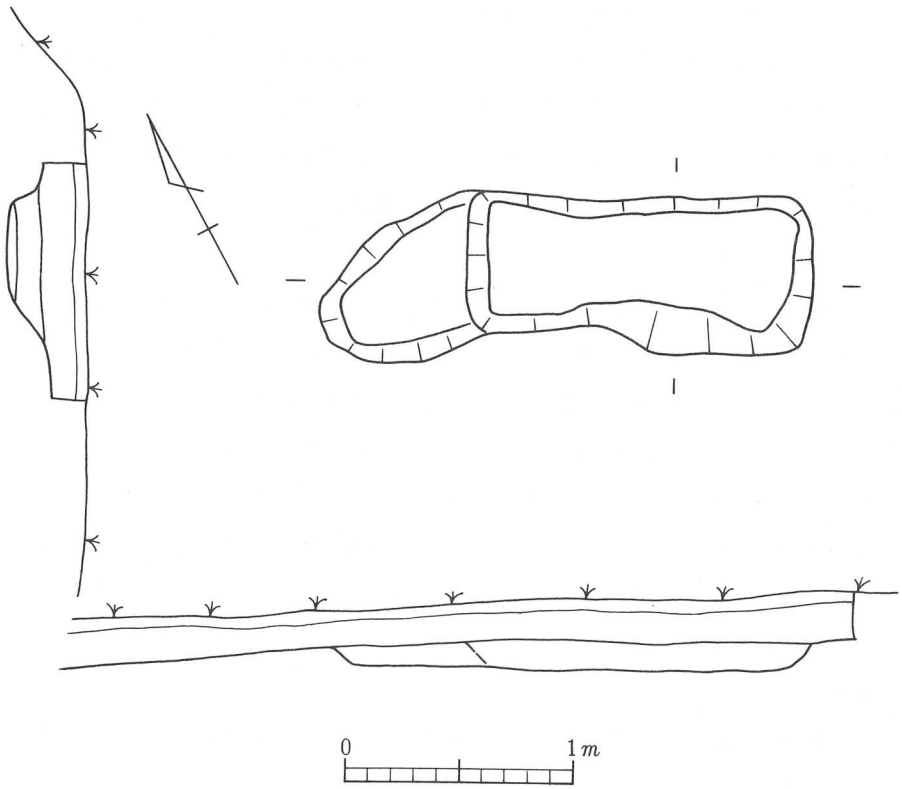


図19　松廻2号墳墓坑実測図

含んでいる点が注意されるのである。すなわち農具の鋤先、工具の鉈などは古墳時代後期のものとしては注目すべきものをもっている。

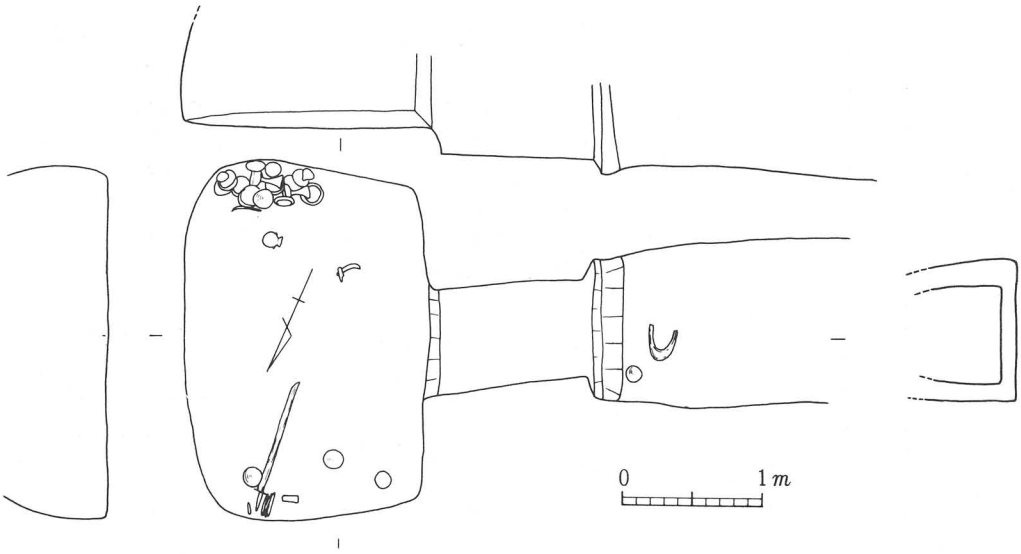


図 20　松廻 1 号横穴実測図

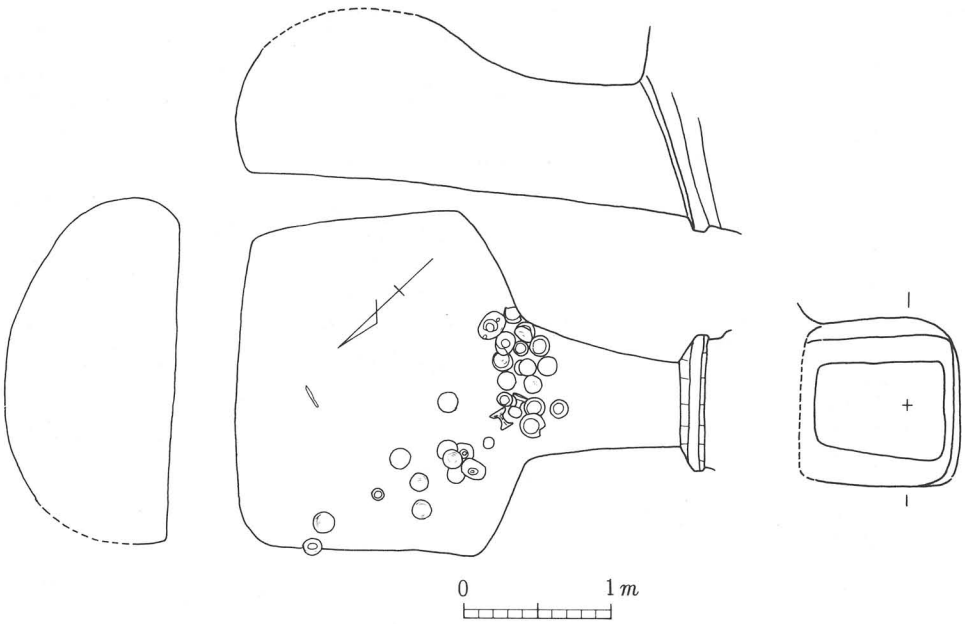


図 21　松廻 4 号横穴実測図

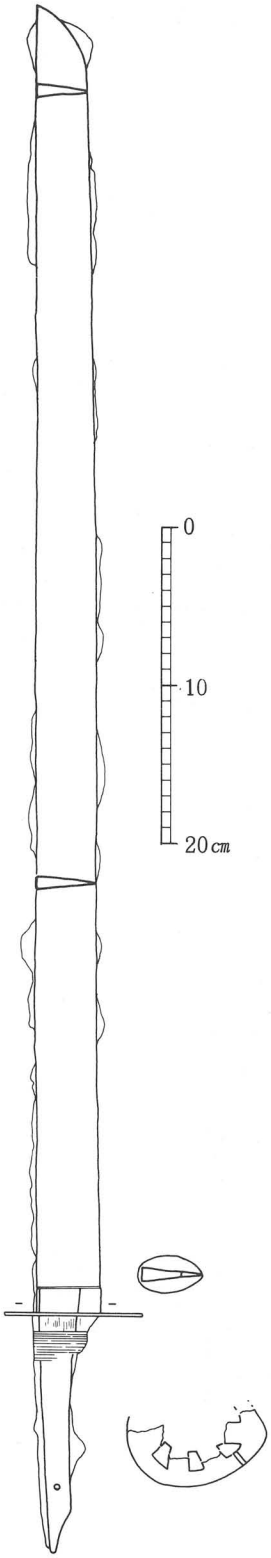


図22　松廻1号横穴出土大刀

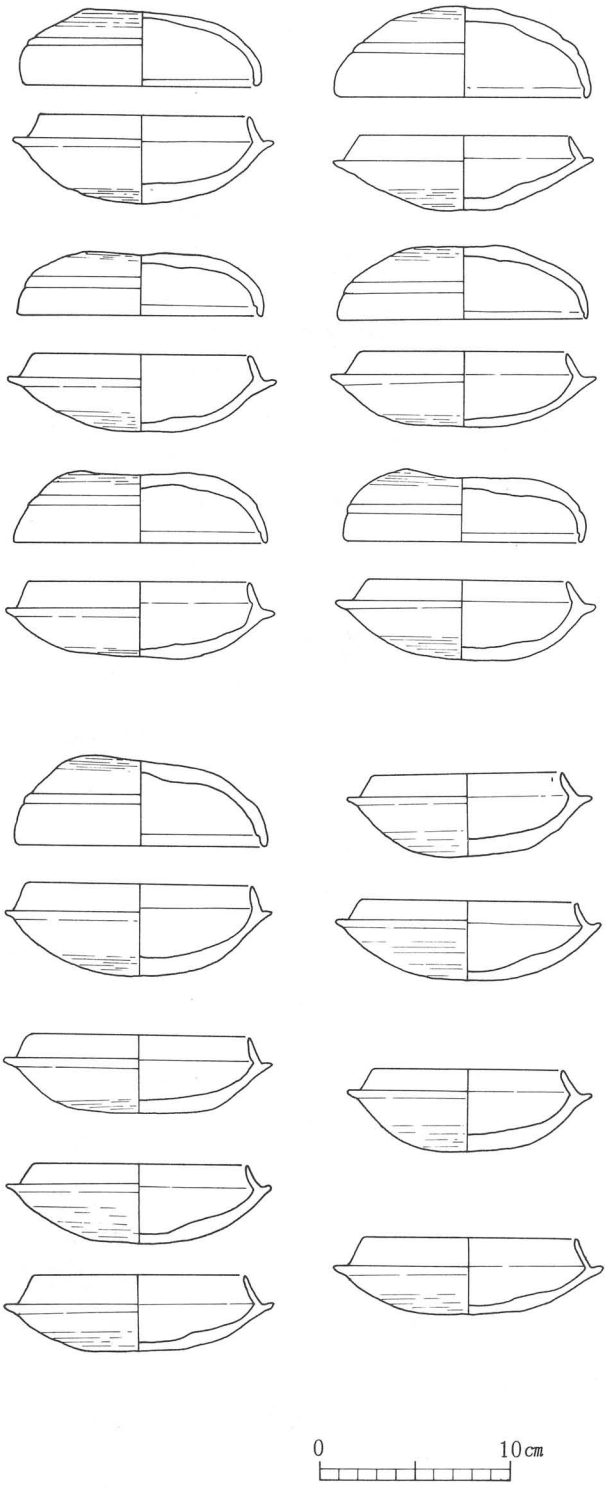


図23　松廻横穴群出土土器

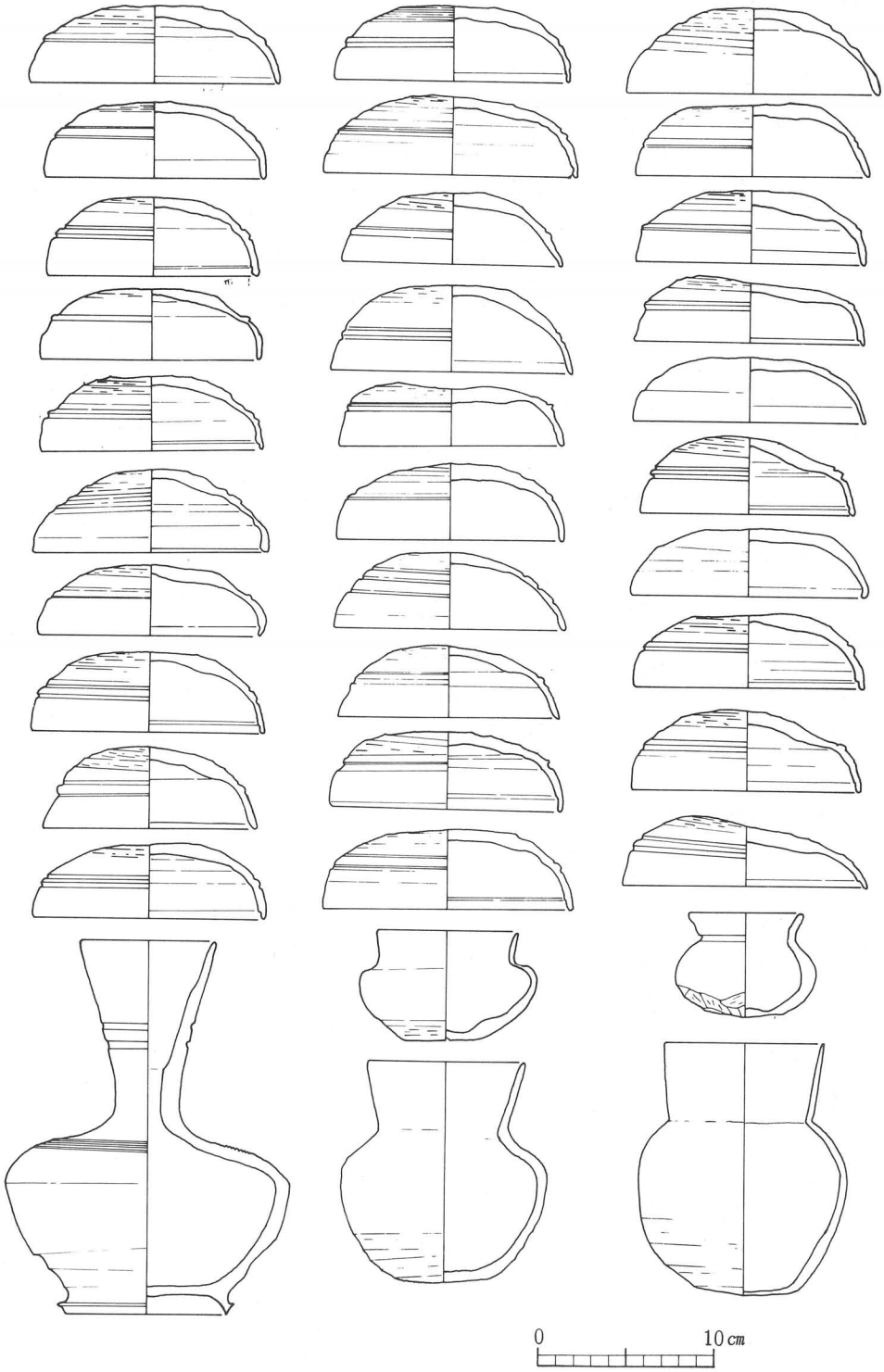


図 24　松廻横穴群出土土器

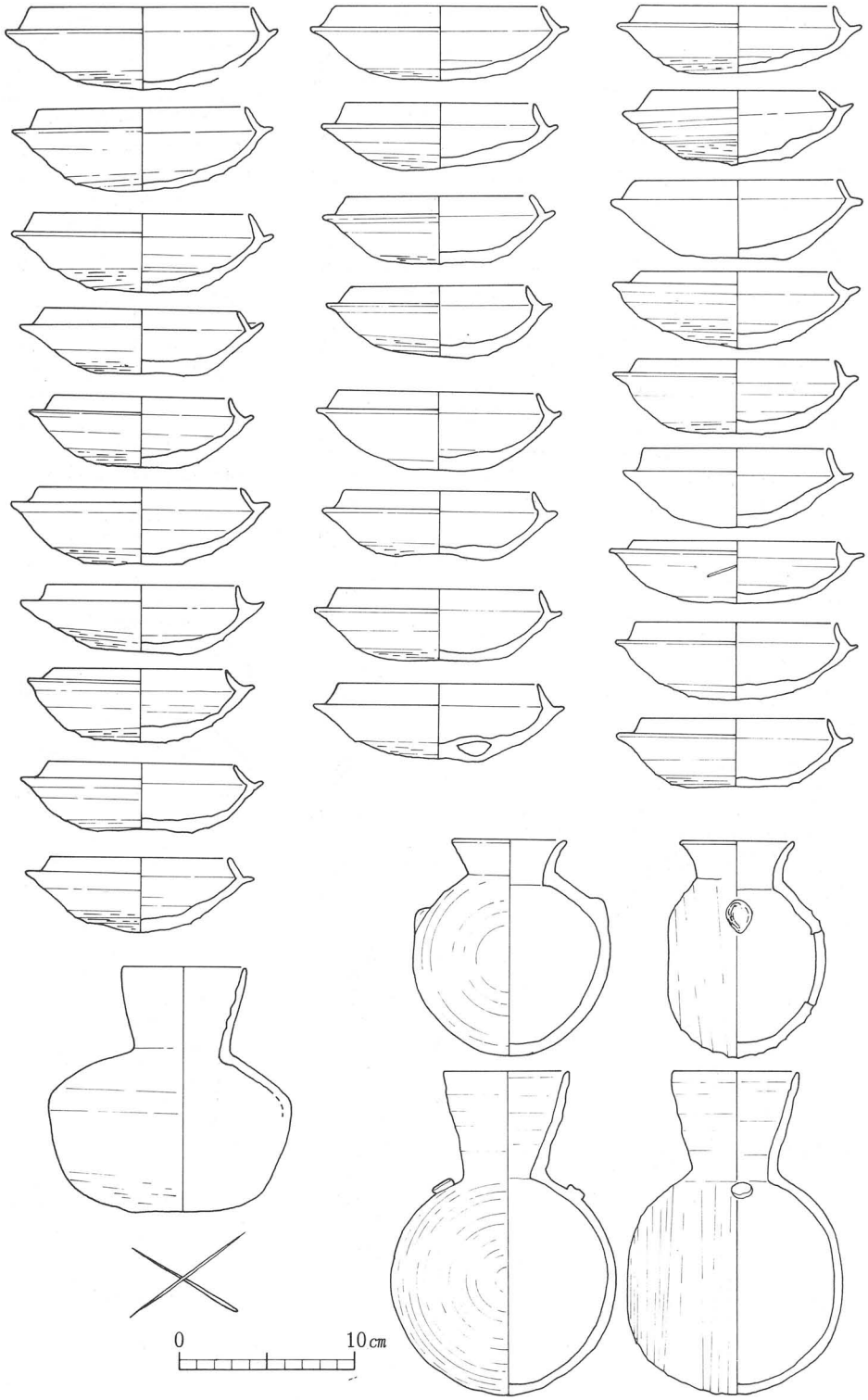


図 25　松廻横穴群出土土器

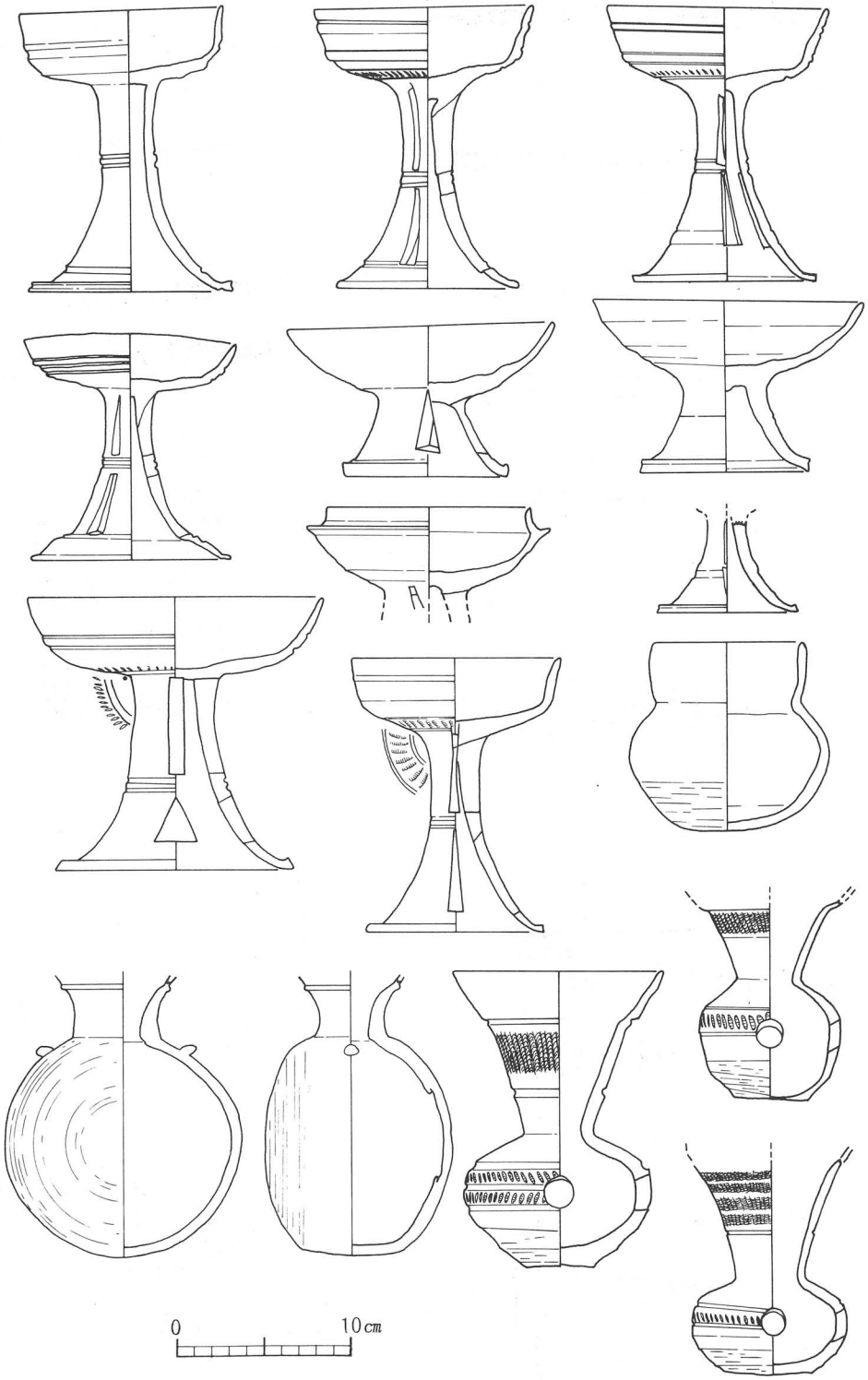


図 26　松廻横穴群出土土器

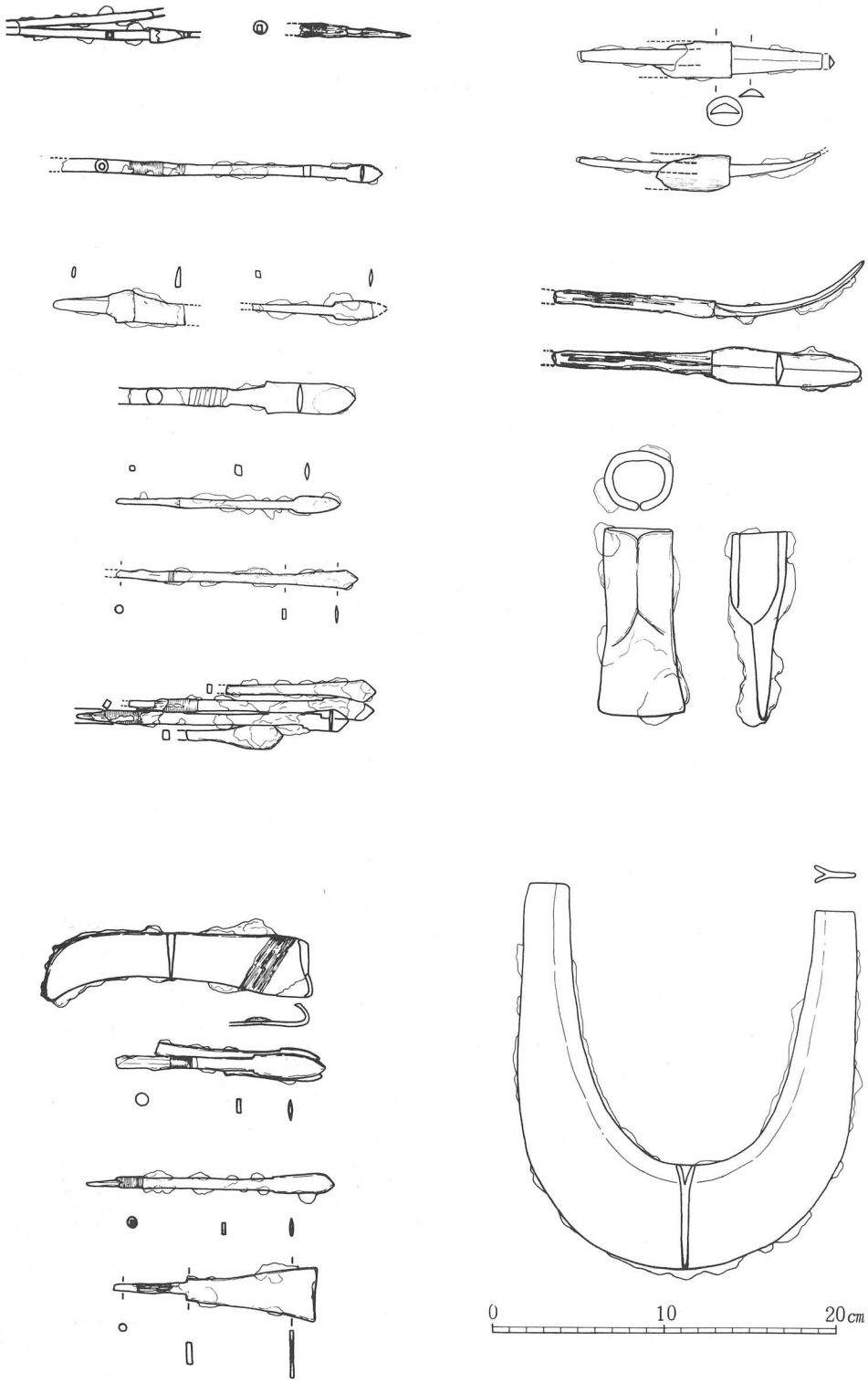


図 27　松廻横穴群出土鉄器

4. 原ノ前横穴

1. 位　置

八東郡八雲村東岩坂字東ノ前に所在する。横穴の位置する丘陵は、八雲村の中央を流れる熊野川に向って西に開く谷部にあたり、現在道路のついている尾根を東にこえると東出雲町に出る。附近には古墳や横穴も多く、八雲最大の石室を持つ雨乞山古墳は低地をはさんで相対する位置にある。この附近が古墳時代以来交通の要地として考えられて来たことを示す証拠ともいえよう。

2. 立　地

本横穴は丘陵の尾根に近く、南西に開口し、工事によって北側壁を削られ横穴であることが確認された。この丘陵の南側にはなおいくつかの落ち込みがみられ、複数の横穴がなお存在することが考えられる。丘陵の傾斜はかなり急である。

3. 規　模

羨道部から奥室までの長さは2.3メートル、玄室の長さ1.4メートルあり幅は2.5メートルであるが、図示したごとく主軸線よりも右が0.7メートル、左が1.8メートルというかたよった形をなし中央に羨道がつかない。高さは羨道部で0.8メートル、玄室中央で0.8メートルで、最も高いところで0.9メートルあり、平面、断面共に粗雑な作りである。ただ羨道部入口の閉塞施設や玄室入口までの作りは丁寧で特に北側に溝状の作りを残すところは注目される。種別でいえば平面長方形丸天井型のくずれたものであるといえよう。

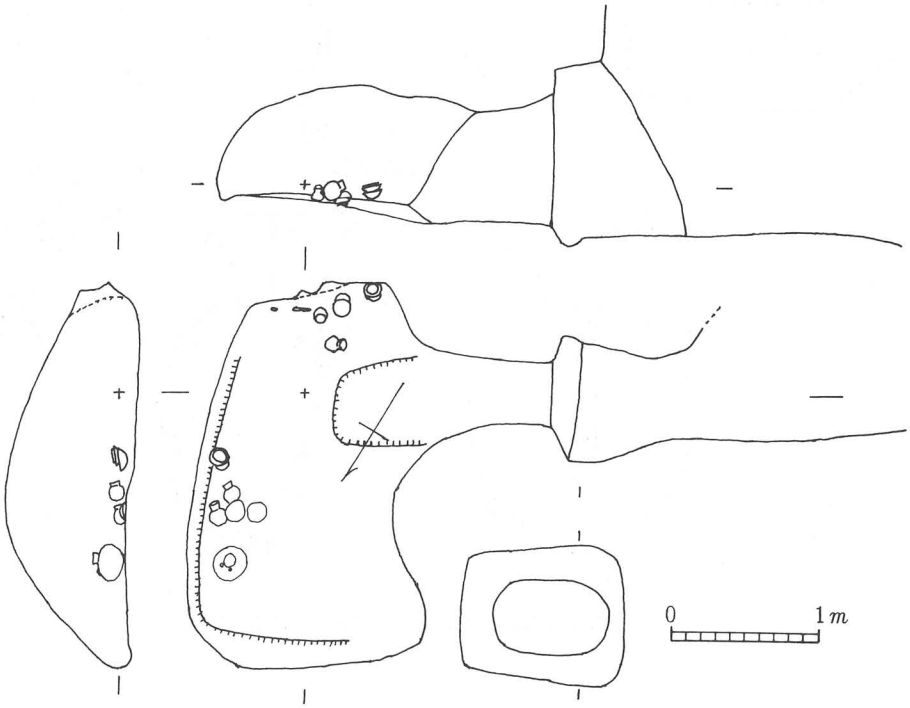


図28　原ノ前横穴実測図

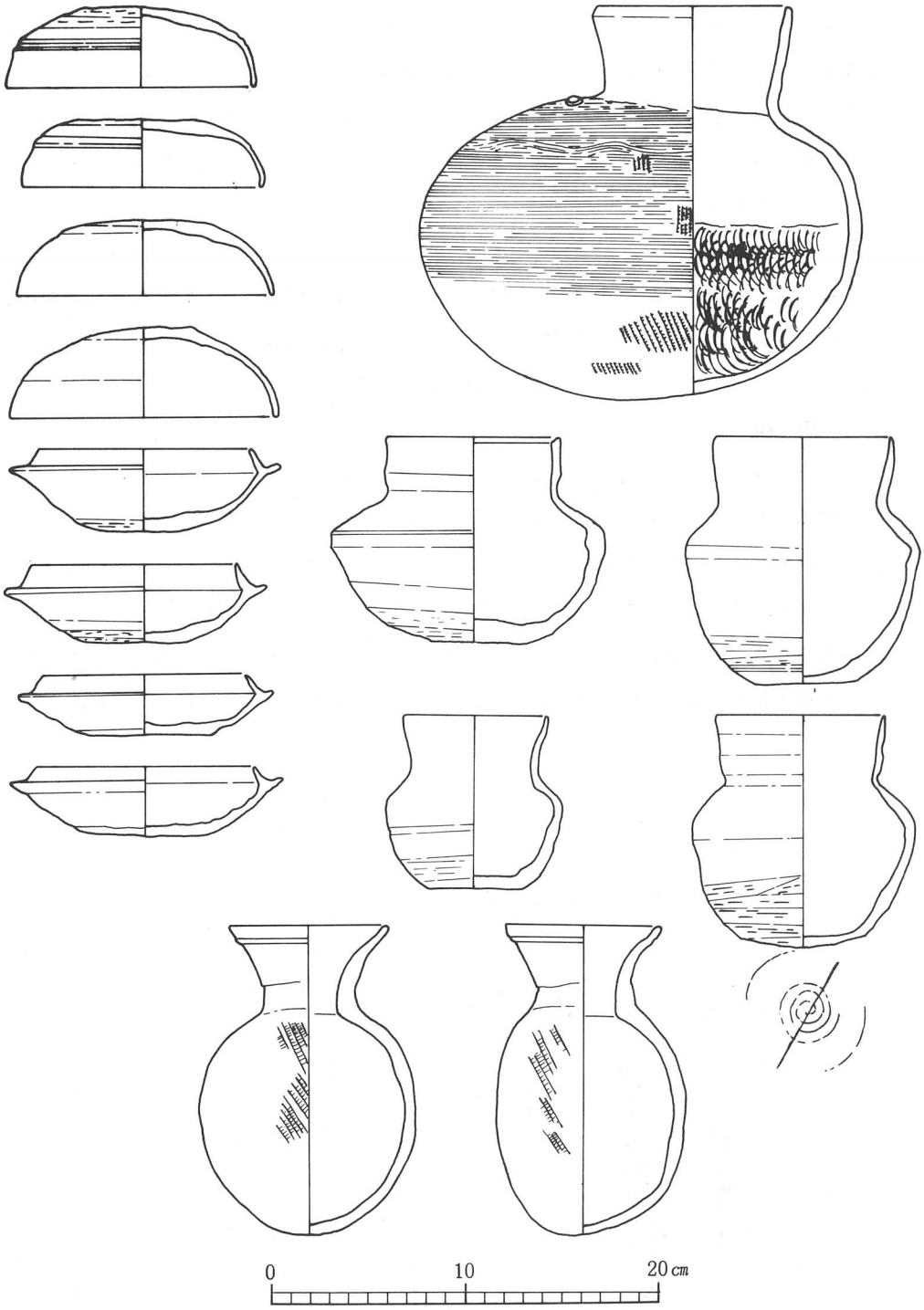


図 29　原ノ前横穴出土土器

4. 遺　物

遺跡は奥壁北側と南側壁からまとまって検出された。種別では須恵器と鉄器である。須恵器は蓋杯4、坩4、提瓶1、横瓶1、鉄器は鏃と刀子である。

5. 結

本横穴はすでにふれたごとく極めて雑な作りである。しかし入口の状況からすれば、この横穴の製作者が極めて技術的に未熟であったとは考えがたい。従って本来は長方型丸天井型をプランとしてもったが何らかの理由で中途で埋葬せざるを得なくなったと考えるべきではなかろうか。それは副葬品の方からも云えることで須恵器などもすべて完形の形の整ったものであり、この時期の横穴からごく普通に出土するものである。時折この種の横穴からは焼成時に出来たいびつなものを含むものがあるが、ここにはそれがない。プランの面から考えると八雲村においては方形丸天井型が圧倒的に多く意宇平野の方形家型のものとは対照的である。しかし意宇平野においても両者が共存している例もあり、必ずしも時期的な差を示すとは考えられない。工人又は技術の一つの地域性とみなすことも出来よう。勿論整正家形の横穴がある地域は古墳文化の中心である平野部であることは言をまたない。

次に須恵器の編年上の位置からする本横穴の成立年代であるが、やゝ新しい様相を持ちつつも山陰の須恵器編年のⅢ期に入るもので6世紀後半と考えて良いであろう。

5. 雨乞山古墳

東岩坂、川向地内の、雨乞祈願の伝説が有り、出雲の三輪山と言われる室山を向いに見る雨乞山南麓にある。又、この地は現在の八雲と東出雲を結ぶ古代の交通の要所であったことが推測される。この古墳は、古くから開口しており、出土品も現在不明であるが、以前から知られており、旧島根県史等にも紹介され、規模、内部構造ともに八雲を代表する古墳である。この墳丘は後に削られた形跡が有り完全ではないが、直径10メートル、高さ2.5メートルほどの円墳と思われる。これは一部地山を削り、その上に盛土をしたものであろう。内部構造は風土記の意宇郡を中心に多く見られる石棺式石室を有し、山代円墳と類似しており、意宇平野を中心とした勢力との関係がうかがえる。この石室は、前室の蓋石は失っているが、1.45メートルの両側石を存し、上面に削った溝が有り、蓋石があったろうし、又、前側には切り込みが施され閉塞石があったと思われ、前室と玄室の複室構造であったことがうかがわれる。用材は玄室内の一面を除き一枚石の切石によるものである。玄室は幅2.15メートル、奥行1.65メートルの長方形で平入の家形である。又床面は前室、玄室ともに一枚石で構成している。

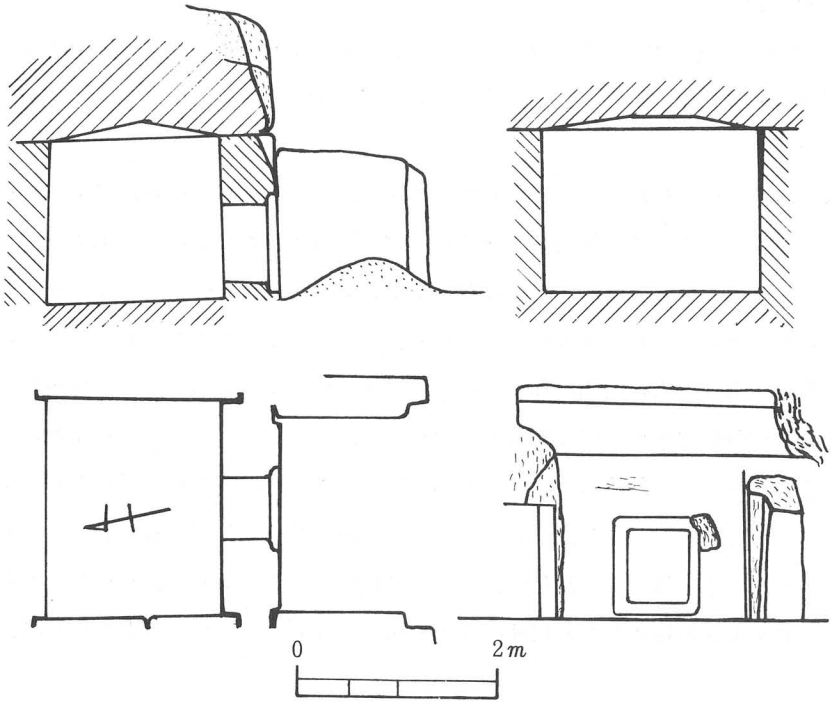


図 30　雨乞山古墳石室実測図

6.　伝熊野出土銅鐸

この銅鐸は現在鳥取県気高郡鹿野町安富寛兵衛氏所蔵のもので、八束郡八雲村熊野から出土したと伝えられるものである。

小形の銅鐸で、濃緑色一部は淡緑色を呈するが、全体に外縁は破損し原形を保っておらず、文様は不明瞭である。型式分類のうえからは扁平鈕式 4 区袈裟襷文銅鐸である。

現存する総高は 20 センチ、幅 13 センチを測り、復原すれば総高は 21.5センチと推測される。現存重量は 648 グラムある。

次に各部分の状況は概略下記のとおりである。

身の高さ 16.5 センチ、身の長さは左端、右端とも 16.4 センチ、中央長さ 16.1 センチ、上端幅 7 センチ、下端幅 11.6 センチある。身の下辺横帯は身の下端から 2.5 センチのところから直線文 3 条がある。そのうえに頂角を上向きとした鋸歯文帯をおき、さらにそのうえを直線文 2 条で区切り、下横帯の袈裟襷へと続いている。鋸歯文単位文は底辺を下に、頂角を上においた状態で、斜線が左斜辺に平行し右上り左下りとなるものである。合計何個が連続するか不明であるが同一単位文が連続する。

四区袈裟襷文は上、中、下横帯と左、中央、右縦帯によって区画されると思われるが、身の中央部分は文様が見えない。横帯の帯幅は 1.3 センチ～1 センチであり、縦帯のそれは 1 センチである。

身の上にある型持の双孔は身上端から 3.2 ～ 3.4 センチのところにあり、孔の径は 1.2

～1.4センチである。身下端の左右に型持孔がそれぞれあるが、破損が大きく形状はわからない。身の厚さは0.3センチあり、内面の突帯は幅0.5センチ、厚さ0.1～0.2センチ断面は梯形をなす。

舞　短径4.8センチ、長径7.1センチあり、舞孔は鋳回り不良のため2つがつながり大きく孔があく。

鈕　外縁は欠失のため不明であるし、鈕孔も欠損する。菱環は外斜面を2帯、内斜面を2帯にわけて左右対称の綾杉文としている。現存する鈕高は3.5センチ、鈕中央幅は1.4センチである。

鰭　頂角を身の内向きとする鋸歯文であり左右対称となる。身上端に近い左右には4条の直線条があり、これは元来飾耳の付く形式を示している。鰭幅1.2センチ此鰭の厚さ0.3～0.4センチである。

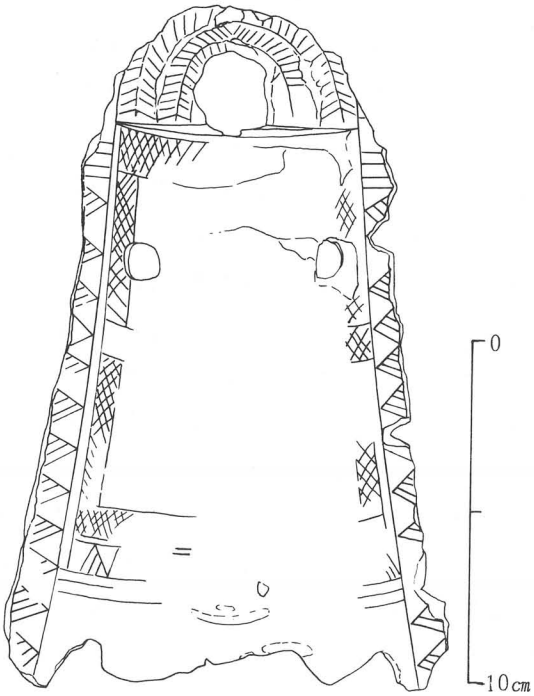


図31　伝熊野出土銅鐸実測図

結　　語

以上のように八雲村の埋蔵文化財を調査したわけであるが、その分布において顕しい特色を示すのは古墳、横穴群であって、それは八雲西百塚山、土井、増福寺古墳群において数が多い。これ等の墳丘については円墳としたものが多いが例えば土井13号墳の如く調査時に方墳と判明したものも少くなく、今後の調査によっては方墳の数が増加することも否定出来ない。それは時期的な差を持ち中期から後期に及んでいる。今後の精査によって更に多くの方墳の増加が待たれる実情である。

数については、すでにふれたが、八雲西百塚山は云うまでもないが土井、増福寺、同裏山古墳群については近隣にないほどの密集度を示しており、その時期や墳形から注目されるものが多く、将来の課題であるが何らかの行政的措置がのぞまれる。なお調査の経過でもふれたが勝負谷1号墳、土井13号墳など調査を経て消滅したものについては、それぞれ報告したわけであるが、今回の悉皆調査ではもれていたものも少なくないわけで調査がこれで終ったというわけではない。これを機会に更に多くの遺跡が発見、調査されることを望む次第である。この報告は分布調査を主体としたが、中にはすでに発掘消滅したものも少なくなく、少しでも多くの遺跡が残るように望むところである。

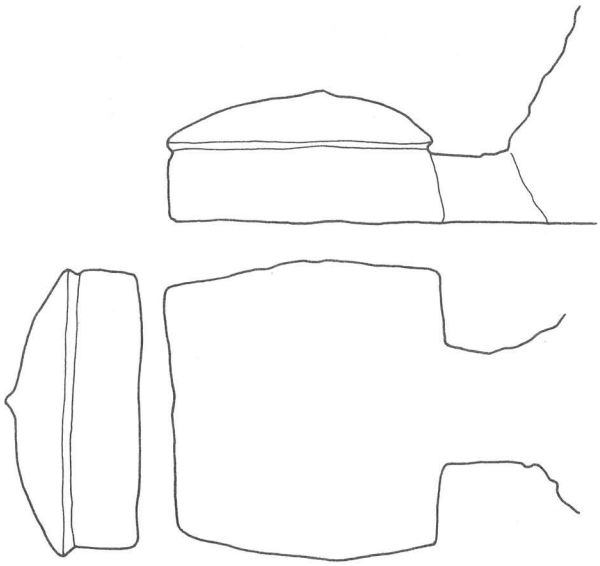
最後に執筆分担を記しておくと遺跡の概況は柳浦啓一、井上寛光、片岡詩子、東森市良が分担した。主要遺跡については、空山遺跡は小野忠熙教授の「空山遺跡」を重点のみとりあげたが、これについては未だ結論が出ていないといっても良い。それは島根大学三浦清教授、文化庁記念物課稲田孝司氏の反論があるからである。勝負谷1号墳についてはすでに概報が出ているが、西尾克己、東森市良のそれを転載した。松廻古墳群は故近藤正氏の調査によるものであり、氏によって概報発行の準備が進められていたのであるが残念ながらこれが不発に終ったため、氏の遺稿をもとにしている。したがってこの部分だけは概報の原稿にしたがったことをお許しいただきたい。もし不備の点があれば、すべて東森の責にあることも明記しておく。原の前横穴は調査に当った東森の報告により、図面は蓮岡法暲氏の手になる。この横穴については今少しくわしい報告をしたいわけであるが、とりあえずここに転載したことを記しておく。雨乞山古墳はすでに山本　清氏の調査があるが今回は平林彰裕の手によって報文をつづってもらった。当所は新たに図を作製する予定であったが時間の関係から山本氏の図を転用したことを明記しておきたい。

伝熊野出土銅鐸については、恩田　清氏によってくわしい由来が明らかにされているが今回はそれに従って詳細な特徴を勝部　昭氏に記述してもらった。

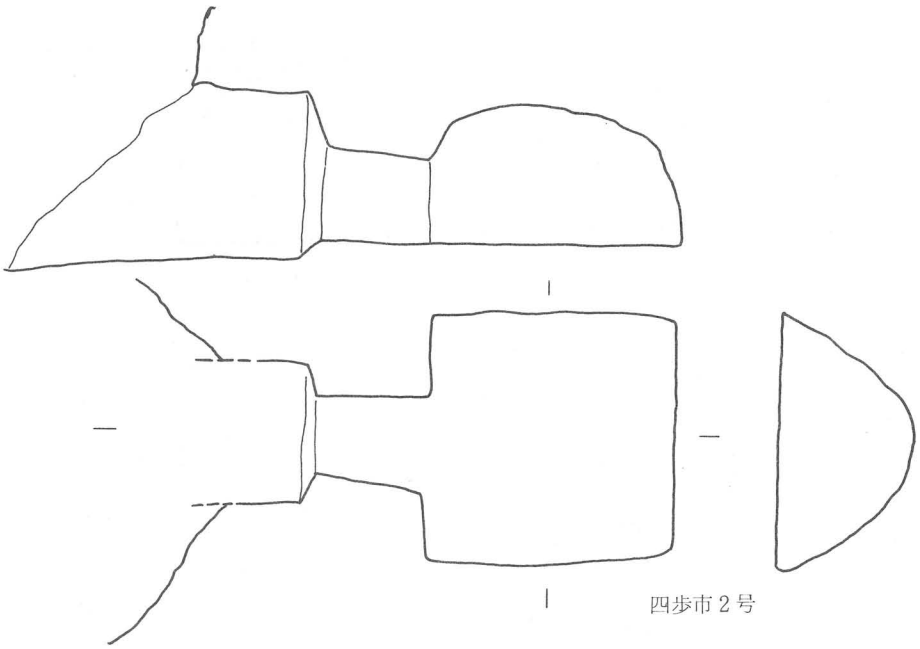
個々の遺跡についてはなお記載が不十分な点もあるが今後機会ある毎にこれをとりあげ問題としてゆきたい考えである。

最後にこの調査に全面的に御協力ねがった八雲村教育委員会に深謝するとともに、開発が進んでいる北部については特に保存の上で注意すべき点があることをのべて結びとする。（東森）

＜附図＞八雲村の横穴略測図

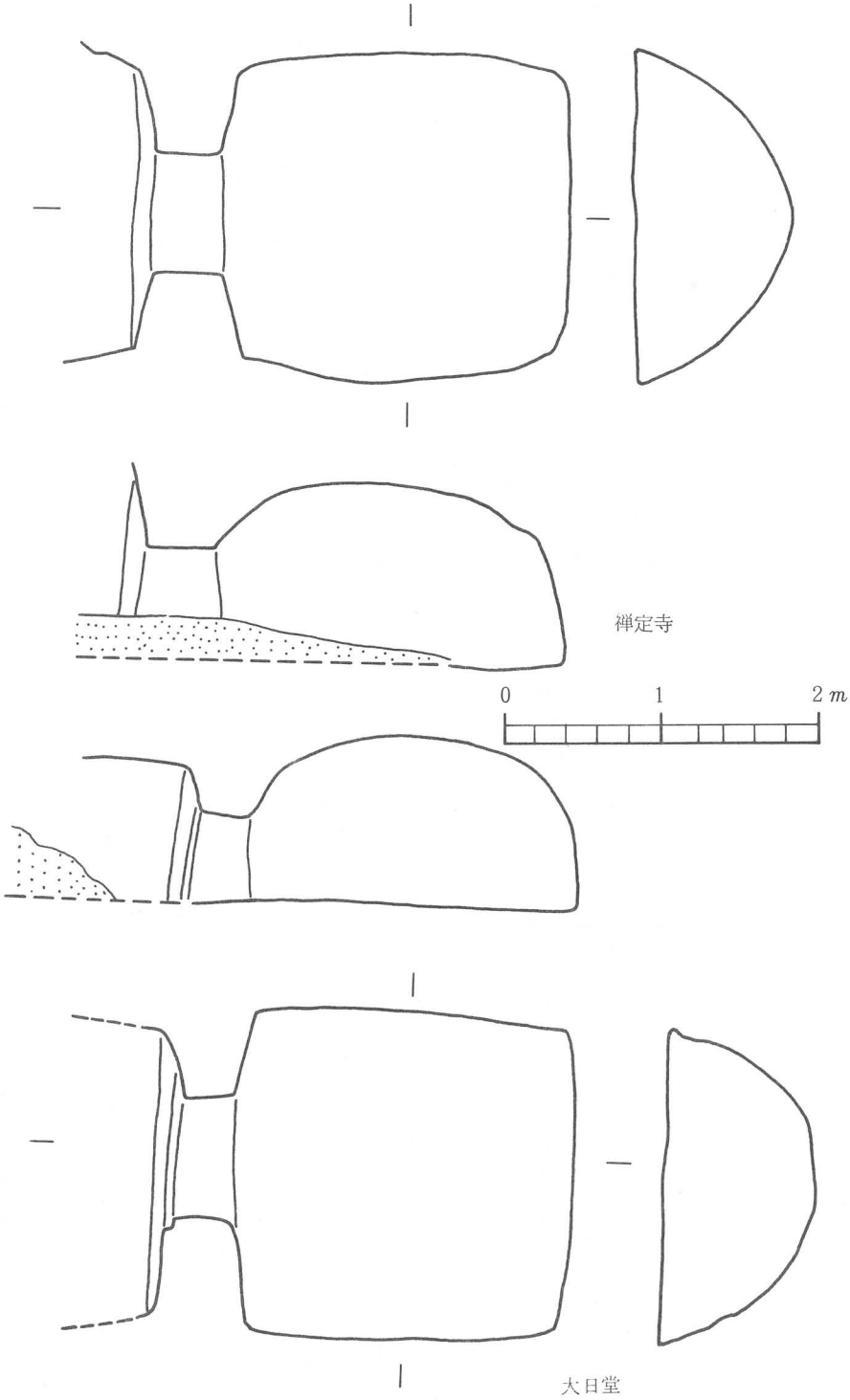


神　納

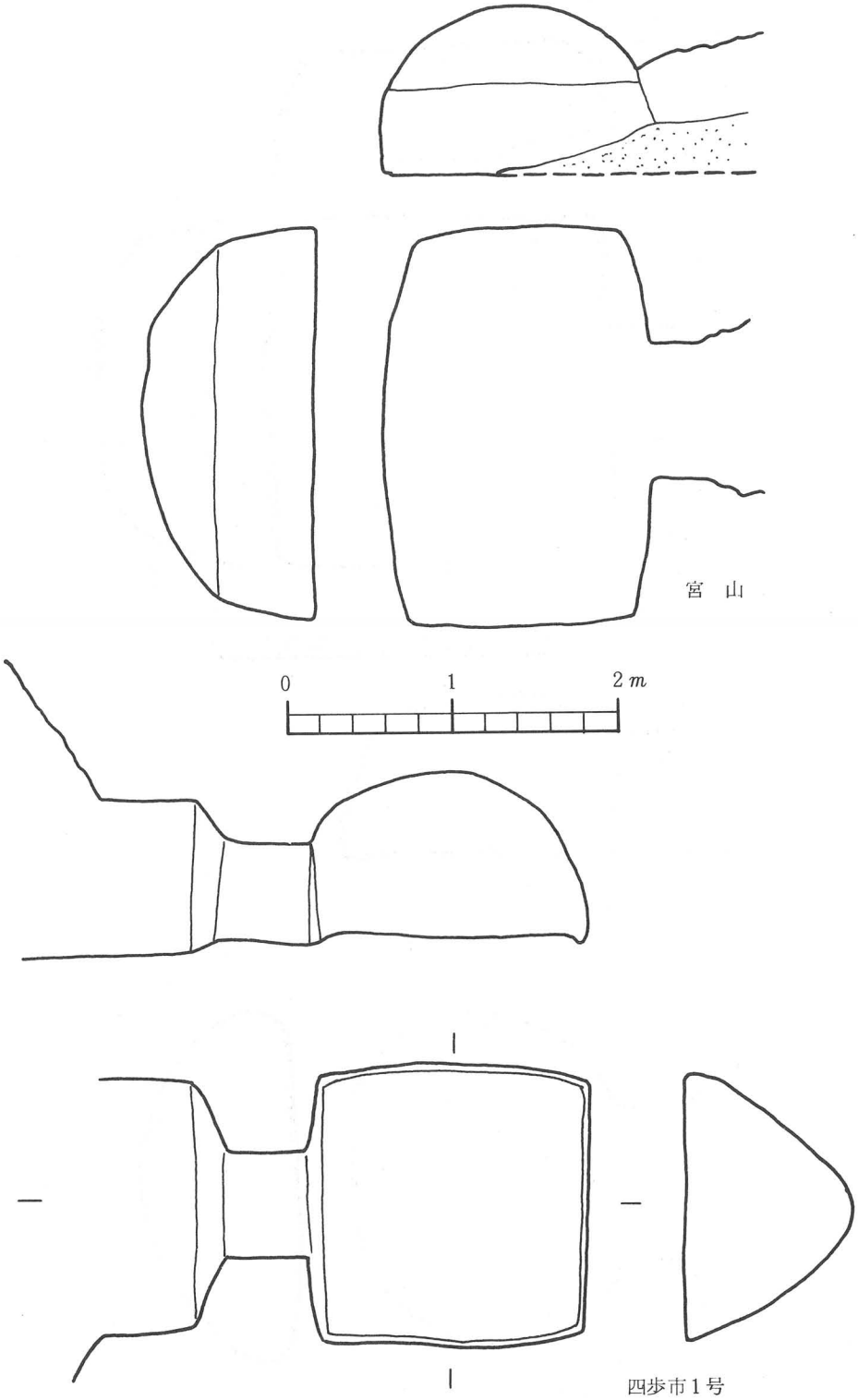


四歩市２号

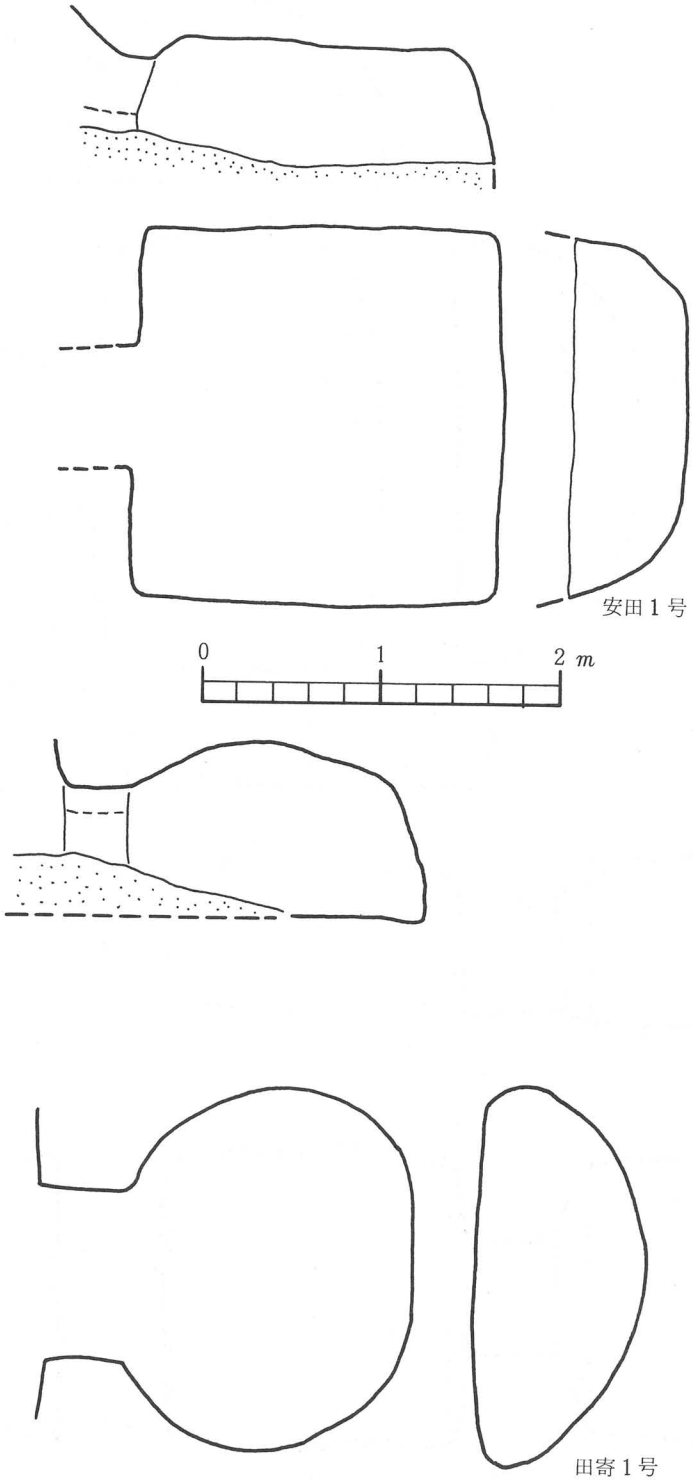
附図１



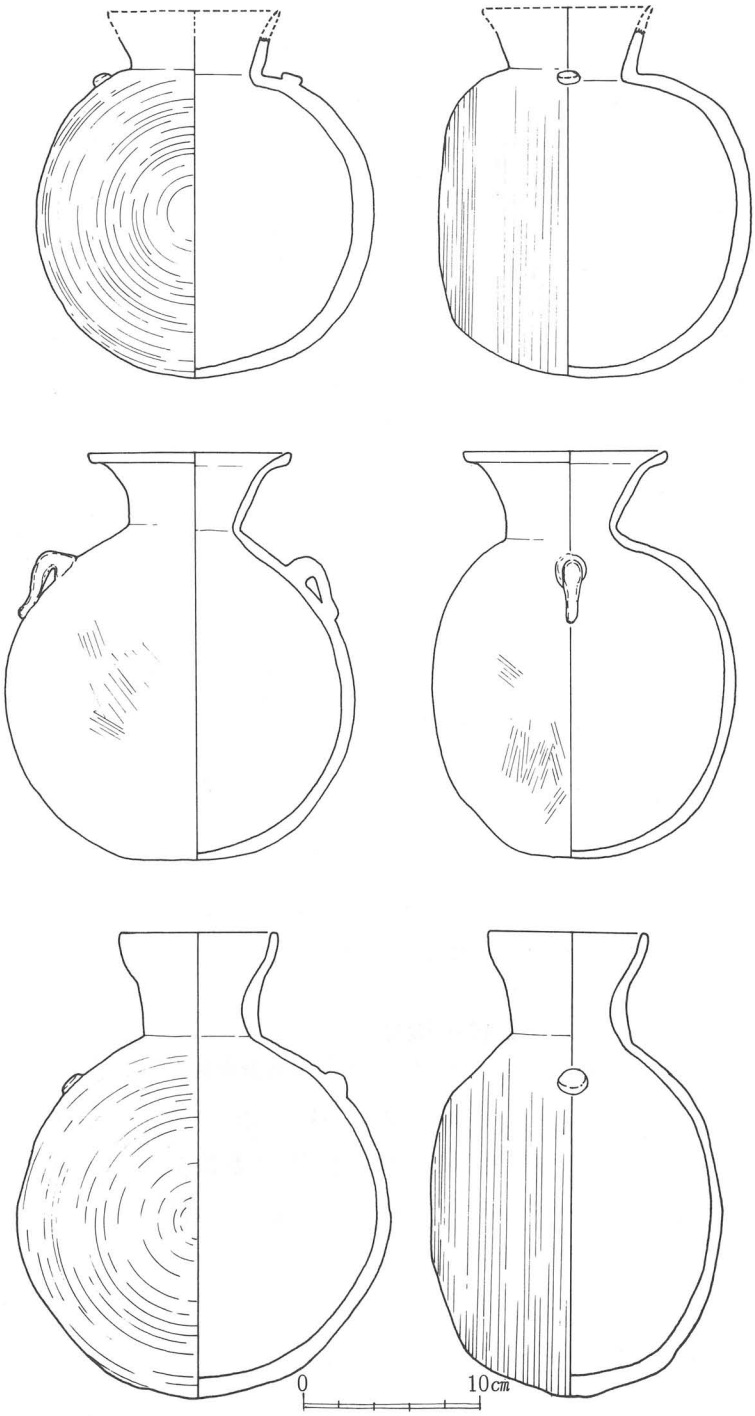
附図 2



附図 3



附図４



附図５　松廻横穴群出土土器（八雲村公民館所蔵）

昭和53年３月15日印刷
昭和53年３月31日発行

八雲村の遺跡

八雲村埋蔵文化財分布調査報告

編集　東　森　市　良

発行　八雲村教育委員会

印刷　報　光　社